
フィールド・オブ・ジャスティス

Mr.J

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フィールド・オブ・ジャスティス

【Nコード】

N3454D

【作者名】

Mr.J

【あらすじ】

「それは神にさえ愛されなかった少年の復讐」正義を築く物語。
―彼等が出会うのは悪魔か天使か？それとも神か？―

白銀の町の悲劇（前書き）

多分この作品はダークファンタジーです。

ダーク系は嫌いって方でも多分気に入っていただけます。

ウォンカ君がPT入りしたら少し明るい感じになっていく（予定な）
んでお願いします^^ノ

白銀の町の悲劇

「寒い。」

少年は布団から起き上がる。

窓の水滴が凍りついている。

質素な木製の家の小さな部屋は非常に寒かった。

世界の北に位置する国<ヴァリクラ>は年中雪が降っている。

ユラユラ降る幻想的な雪を想像しがちであるが、現実はそんなに甘くない。

<降る>というよりは<落下>に近いそれは、頬に当たる度に小さな衝撃を皮膚に与える。

「起きないと・・・。」

少年は冷たい床に素足を置いた。

ジワジワではなく一瞬で全身が凍りつくようだ。

リビングに下りると母親が朝食を作っていた。

「おはよう・・・。」

「ん？今日は早いわね。」

ほら、顔洗っておいで。」

「うん。」

少年は洗面台へ向かった。

洗面台には<魔法陣>が描かれている。

これは火の魔法陣。

ゆえにこの洗面台からは湯が出る。

少年は顔を洗って席に着き、朝食を食べた。

「行ってきます！」

少年は元気よく声を上げ、家を出た。

空は珍しく青かった。

昨晚の吹雪で地面には白銀の世界が広がっている。

「おっす！」

友人が声をかけてくる。

少年は気前よく返事をして共に学校へ向かった。

「なあなあフォン、今日のテストなんだったっけ？」

「え？もしかして勉強してないの！？？」

「悪いかよ？」

「悪いよ！だって、今回のテストで欠点取ったら君は留年じゃないか！！」

「大丈夫大丈夫、ここぞというときに覚醒して欠点は免れるから！」

「覚醒って・・・じゃあ今日の教科教えなくていいよね？」

「おお！それは卑怯ぞ！」

「・・・。」

「頼む！このとーり！」

友人は手を拝むように（つてか拝んでいる）合わせた。

フォンは呆れたようにため息をつく。

「はあ・・・魔法陣学、範囲は水と闇と光。

あと歴史で勇者のどこ。」

「おお！勇者あたりは得意だ！」

英雄と救世主のそこは話がややこしくて・・・。」

「賢者のところはもつと難しいよ。ボク、先に勉強したんだ。」

「はあ！？おまえバカじゃねーの？」

「・・・。」

「うあ！そんな哀れんだ目で見んなああ！！！」

友人は1人で苦しがる。

「とにかくだ！」

そんな勉強ばかりじゃあ人生楽しめねえぞ！！？

11歳といやあ健全に女の子とお付き合いしても犯罪にはならねえ

「!!」
「.....」

そんな会話を交わしつつ2人は学校へやってきた。

「はじめー。」

教師の合図により期末テストが始まった。

フォンはスラスラと答えを書いていく。

（ええと・・・これは・・・ん？こっちか、コレひっかけだな。
うわ！この虫食い難しい！・・・って、下に語群あるじゃないか！！
わかりにくいよ・・・。）

消しゴムと黒鉛の死闘が繰り広げられる中、終了の合図が学校中に
鳴り響く。

全員が隣の席の友人と答え合わせをしている。

その間を教師が割って入り、答案用紙を回収する。

「っで？リコルは覚醒できた？」

フォンがイタズラっぽく友人に話しかける。

「ふっふっふっ、フォン、やはり俺は土壇場で覚醒する男だぜ！」

リコルは自慢げに答案用紙を見せた。

ざっと見た感じでは欠点ではなさそうだ。

「ちえ。」

「なにその態度!？」

「いやあ、やっぱここはお約束で欠点覚悟の展開でないと.....」

「んなわけにいくか！こっちは留年かかってんだよ！」

「じゃあそうなる前になんとかしようよ.....」

ま、次の歴史もがんばって。」

「うわ！余裕の発言ムカツク~~~~!!!!」

しかし、次に鳴り響いたのは試験開始の合図ではなく警報。
町で轟音が鳴り響いた。

「な、なに!!?」

全員が音のする方へ視線を向けた。

校門から黒紫の犬のモンスターが突っ込んでくる。

「モンスター!!?しかも4匹も!!!?!」

「逃げるー!!!」

誰かがそう叫ぶ、教室にいた皆があわてて逃げる。

しかし、逃げ切るよりも先にモンスターの1匹が窓ガラスを貫いて飛びこんできた。

「きゃーーーー!!!」

クラスメイトの女の子が悲痛の叫びを上げて絶命した。

そしてその隣にいた男の子も喉を引き裂かれた。

犬のモンスターは次の獲物へと当たりを見渡す。

フォンと目が合う。

（やばい!）

本能がそう告げる。

逃げなければ殺される。それはわかっているのに身体が動かない。

犬のモンスターは狙いを定めるかのように向き直る。

そして、強靱な後ろ足で床を蹴って飛び掛ってきた。

「うわああああ!!!」

目の前が真っ暗になる。

そして、ゆっくりと意識が遠のいていった。

白銀の町の悲劇（後書き）

こんにちわ！

いくつも同時連載小説を書いてるMr・Jです！

連載作品が重なるほど内容はよくなっていってます！

ゆえに！

この作品はかなり良いできになると思います。

皆様、どうか暖か目で見てください^^ノ

ヴァリクラの英雄

日は天高く昇っており、木陰で昼寝をするには最適の気温と風だった。

長く続く戦争の合間で、一瞬だけ訪れるこの平和なひとは、日々前線で戦っている騎士にとって最高の時間である。

しかし、その時みる夢もが最高とはいえない。

思い出したくもない過去が、瞼の裏の漆黒の世界で描かれることもある。

「・・・。」

騎士はゆっくりと目を開けた。

木に背中をあずけて眠っていた。目前に鞘に収められた大きな剣を支える手が見える。

「フォン隊長？」

女性の声が聞こえた。

しかし、まだ完全に起きていない騎士長は返事をしない。

「フォン！！！！」

耳元で名前を叫ばれた。

「！」

ホワイトアウトしかけるのをこらえて意識を無理やり現実を引き戻す。

あのまま夢見心地でいたら本当に気絶しかねなかつただろう。

「起きた？」

女性は少々トゲのある言い方をする。

「ああ・・・。」

騎士長フォンはゆっくりと腰を上げた。

「その神経を疑うわ。」

「なにがだ？」

「ここは戦場よ！？」

いくら拠点とはいえ、ちょっと気が緩んでない？」

「睨み合いをしているだけだろう？」

「そんなに緊張感を高めてもギスギスするだけだ。」

フォンは言い捨ててテントへ戻ろうとする。

しかし、女性は捨てられた言葉を拾う。

「それが一国の兵士を預かる騎士長様の言葉？」

確かに今は睨み合いの状態だけど、いつ敵が奇襲をかけてくるかわからないじゃない！！」

「今の状況で仕掛けてくるのはバカな軍師かアホな騎士長か気のたつた女だけだ。」

「あのね・・・私は進軍しないことに怒ってるんじゃないの！」

騎士長が分けのわからないことを他の兵士に任せて居眠りしていることに怒ってるの！！」

「わけのわからないこと？」

フォンはテントに入りながら尋ねた。

女性はそれを追いかけてテントに入りながら答えた。

「どうしてさつきから騎士たちに柵の点検とかテントの設置場所を微妙にずらさせてるの？」

「それだけか？」

フォンはイスに座って周辺地図を広げる。

「いいえ、一番云いたいのは、昨晚から一部の小隊が見当たらないんですけど？」

「ちよつと仕事を頼んだ。」

「仕事？」

「仕事。」

フォンは入れてあったコーヒーを飲んだ。

入れてから大分時間がたっていたので、すでにコーヒーは冷えている。

「仕事ってなに？」

「今何時？」

「聞ってるの!!?」

「まあまあ。」

フォンはコーヒートをテーブルに置きながらなだめる。

「・・・ええと、今は13時23分。うわ!アンタ4時間も寝てたの!？」

後半は聞かず、フォンはテントの外に出た。

女性があわててそれを追いかけた。

「フォン?」

「さて問題です。」

俺は昨日の14時からテントを微妙にずらすように言いました。
今どれくらいずれたでしょう。

わかるかな?魔道隊長リーデニス殿?

「え?ええと・・・3m?」

「正解。」

「それが何?」

「じゃあもうひとつヒントだ。」

ここに陣を張ってから何日たった?

「1週間。」

「最後のヒントだ。」

敵に関する有名な情報は?」

「敵はアーデラス。魔道戦術を得意とする。・・・ぐらいなだけ
ど?」

あと漁業が盛んだとか、それくらいしか・・・。」

「・・・わからないか?」

「???」

「魔道士の君ならわかるだろう?」

遠距離魔法において、数CMの誤差は重大だと。」

すると突然、陣の端が爆発した。

それは遠距離の風魔法だ。

風魔法に巻き込まれたテントや柵は簡単に吹きとんだ。

「相手はバカな軍師か？それともアホな騎士長か？」

「何云ってるの！？早く衛生兵を！！」

しかし、フォンはリーデニスを無視して移動をはじめた。

「ちよつと！見捨てるの！！？」

「壊れたテント回収したってしかたないだろ？」

「バカ！！あそこにはまだ兵士が居るじゃない！！」

「柵の点検はテントの中身を移すための力モフラージュ。

もうあそこには何も残ってはいない。」

「え？」

リーデニスは呆気にとられる。

陣の目前がユラユラゆれている。

ここは草木が生い茂っている。さっきの風魔法でゆれても不思議ではない。

しかし、それにしては妙だ。

「奇襲が失敗したのを悟ったんだろう。」

あそこには最初にわかりやすく火薬を運んだからなあ……。」

風魔法の影響で気流が変わり、陣全体に風が吹く。

もし、火薬を運んでいなかったら、今頃陣は火の海だ。

舞い上がる風に髪は誘われる。

「魔道部隊に前方好きなところへ炎魔法を発射させろ。

全軍！魔道部隊の攻撃後、前進しろ！！」

フォンは声を上げていった。

「魔道部隊詠唱開始！！！」

リーデニスは叫んだ。

そして炎魔法が前方の草むらに放たれる。

ところどころに炎を舞い上がり、隠れていた兵士達は散り散りになった。

そこへ騎士が突っ込む。

兵士達は混乱する中、同胞の断末魔を聞いてさらに乱れる。

「アーデラス軍・本拠地」

「ご報告します！魔道隊の風魔法は失敗！

我が軍は敵陣前にて奇襲を受けております！！」

騎士長を剣を取った。

「ヴァリクラの英雄フォン・カマスティン……見くびるつもりは
なかったがな……」

私も出る！

第2から第5小隊は私に続け！」

騎士長は竜にまたがり戦場を突っ切る。

「ヴァリクラ軍・本拠地」

「伝令！敵陣より多数の援軍を確認！！」

「全軍本陣まで撤退。」

「は！！」

リーデニスは納得がいかないと云わんばかりに講義した。

「撤退？」

「撤退。」

ほどなくして全軍が撤退した。

アーデラス軍はこれ幸いと撤退、後ろから来る援軍と合流する。

「これは……」

フォン・カマスティン！！出て来い！！私と一騎討ちをしろ！！」

「意外だったな、気の立った女の方だったか。」

フォンはゆつくりと足を進めた。

草むらは焼け、アーデラスの兵士の遺体が転がっている。

「我が同胞のカタキ……私が討ち取ってみせる！」

「一騎討ちを申し込まれた以上、不当な行為はいたしません。

後ろをご覧ください。」

フォンは丁寧に後ろを指した。

後ろを振りむいたアーデラスの兵士の士気は落ちた。
見れば、さっきまで居た本陣が燃え上がっていた。

「どういうことだ!？」

アーデラスの騎士長がフォンを問いたです。

「昨晚から伏兵を忍ばせておりまして。」

「貴様……!」

「私は無意味な殺しをしたくはありません。

降伏してください。」

「……」

全軍、武器を捨てる。」

アーダラスの騎士長は命令を下した。

その命令に背くものではなく、全員が武器を捨てた。

「しかし……」

アーデラスの騎士長は竜から降りて焼けた地面の上に立った。

「一騎討ちは受けてもらう。」

我が同胞がつけた無念、すべて私が引き受ける!!」

「死ぬ覚悟をした相手が、たとえ女であっても手加減はしないぞ?」

フォンはゆつくりと大剣を抜いた。

「アーデラス王国騎士長リバリー・アキュレル……参る!!」

リバリーは焦げた土を蹴り上げた。

上から下へ振りかざされた剣をフォンは剣を横にして受け止める。

切っ先を地面に向けて、まだ勢いのある一撃を受け流す。

そして、受け流した体制のまま横から切り込む。

リバリーは抵抗することもできず、横腹に一撃を受けた。

フォンは動きを止めることなく縦に一撃を決める。

そして、そのままヒジを腰の後ろまで引き、右足を軸に構える、剣

は地面と平行にあり、切っ先はリバリーの身体を中心に指す。

「龍砲斬!!」

勢いよく突き出された剣から突風が起こり、その突風はリバリーを

切り刻む。

「きゃあああああ！！！！！！」

リバリーは吹き飛ばされ、無残な姿で焼けた地面に倒れこんだ。断末魔の叫びがまだ燃えていない草むらを揺らす。

「これが・・・ヴァリクラの英雄・・・。」

「強すぎる・・・。」

アーデラスの兵士達は口々にフォンを称えた。

フォンは地面にヒザをつき、剣を地面に突き立て、今日死んでいった者たちへ祈りをささげた。

そして、取り残された兵士たちへ視線を向けた。

「アーデラス騎士長は今死んだ。最終防衛線となっていた本拠地も落ちた。」

よって戦争は事実上、終戦となる。

しかし、まだ紙の上では戦争は続いている。

ゆえに、君たちは捕虜扱いとなる。

アーデラスの偉大なる騎士長リバリー殿から預かった君たちの命、故意に傷つけたりはしない。」

そういつてフォンは怪我人の治療を衛生兵に任せた。

「・・・。」

「お疲れ様、すごかったよ、あんな一方的な勝利、見たことない。多分、歴代の一騎討ちの中で最速なんじゃない？」

リーデニスはフォンにコーヒーを差し出す。

「ああ・・・。ありがとう。」

フォンは差し出されたコーヒーを受け取り、水面を眺めた。

「俺が強いんじゃない。」

あの人は死ぬつもりで突っ込んできたんだ・・・あんなもの、すでに一騎討ちどころか、戦闘ですらない・・・。」

コーヒーの水面に写る自分の姿が揺らぐ。

（何故・・・俺はこんなことをしているのか・・・。）

ヴァリクラの英雄（後書き）

どうでしたでしょうか？

今回は第一話から13年後の話です。

次回はまあ・・・戦闘ないですね^^；

特にイベントないです^^；

でも四話はこうご期待！！

帝国の裏

「ヴァリクラ帝国・王都シューデン」

王都に英雄の部隊が到着する。

後ろには捕虜となったアーデラスの兵が連れられている。

その捕虜達にかかえられた棺には、優秀な騎士長の遺体が収められている。

町の誰もが歓声をあげる。

しかし、捕虜達にとってそれは気持ちの良いものではない。

フォンも、この歓声はあまり心地よいものではなかった。

「王城・王室」

「陛下、フォンの部隊が帰還いたしました。」

「そうか。」

して、その結果は？」

「はい、完勝でございます。」

後ろに大勢の捕虜を引き連れております。」

それを聞いてヴァリクラ帝国帝王ギュリゼ12世は声を上げて笑った。

「はっはっはっ！！」

フォンらしい。

いいだろう、捕虜達に暖かい寝床と食事と酒を用意してやれ。」

「よろしいのですか？」

毎度のことながら、わが国の食料などは……。」

「よいよい。」

今のこの豊かさはフォンの活躍によるものだ。

その英雄の連れてきた客人とあらば、手厚くもてなさなければな。」

ヴァリクラは元々北の雪原地帯に位置する小国であった。
フォンが小隊長に任命されたのを期に、この国は栄え始めた。
それは国民にとっても、騎士にとっても良い結果を生み出した。
しかし、当然これを良く思わない者が居ない訳ではない。

〔王城・廊下〕

「ふう……。」

「どうしたの？」

フォンは長い廊下を歩きながらため息をつく。

隣を歩いていたリーデリスは不自然なため息に疑問をいなく。

「少し、疲れた。」

「王都に入ってからはずっとその大きい剣を持ち歩いているからで
しょ？」

「そうかもな。」

「どこかに置いとけばいいのに。」

「いや、俺は物をなくしやすいからな……。この剣も5代目だ。」

2人が歩いていると、待っていたかのように男が近寄ってきた。

「いやあ、さすが英雄様だ。」

この度の戦も無事に勝利なさったそうなの。」

「生まれつき運は強くてね。」

「私の忠告を聞かなかったのか？」

「聞かなかったからこそ、この戦争に勝ったんだ。」

「貴様……。」

「あんたが自分の得になるように戦争を終わらせたいのはわかる。
しかし、そんなことしているうちに国民が死ぬ、兵が死ぬ、物資が
尽きる。」

あんたが3年もかけて戦争を終わらせられなかったから、陛下は俺
にこの戦の指揮を委ねられた……。違うか？」

「おまえはわかつてはいない。」

あと少し、あと少しでこの国が最も得をする勝ち方ができたものを・
・。。」

「それまでの間にいつたい何人の人間を殺すつもりだ？」

云つておくが、先日俺が討ち取った女騎士長は確かに武力はなかったが、むこうでは才女と謳われる策士だ。

あと何日この国が持ちこたえられていたか・。。。」

「。。。。」

後悔しない、利口な生き方をしろよ？フォン。」

「あいにく、俺はすでに後悔しているんでね。」

言い捨ててフォンは歩き始めた。

少し遅れてリーデニスが着いて行く。

「。。。。」

ヴァリクラ帝国外交大臣リーエー。

この男はアーデラスとの戦争において指揮を任されていたが、2年半かかっても状況は変わらなかった。

さらに、弱ってきた2国を制圧しようと隣国まで攻めてきたのだ。

それゆえ、皇帝は指揮の半分をフォンに委ねた。

結果、隣国の侵攻は防がれ、さらにアーデラス戦の指揮も任され、見事打ち勝った。

当然、この男からすれば、面白くない話だ。

リーエーに男が駆け寄っていく。

「準備が整いました。」

「ふっ。」

リーエーは不適な笑みを浮かべた。

「明日は暇か？」

「何？デートのお誘い？」

フォンの問いをリーデニスは軽く受け流す。

「1ヶ月ぶりですか？」

騎士長様がお声をかけてくださるのは・・・？」

「戦争中だったんでな。」

怒っているのか？」

「1ヶ月ほったらかしにされて怒らない女はいなくてよ？」

んゝ明日は無理、召集かかってるから。

明後日でいい？」

「ああ、かまわない。」

「んじゃあ明後日ね！」

「ああ。」

リーデニスは笑顔で手を振りながら自分の部屋へ戻っていった。

騎士長及び各隊長には王城に専用の部屋が設けられるのだ。

フォンはそれから無言で部屋へ戻っていった。

帝国の裏（後書き）

まあ普通でしたよね。

なんかフクセンっぽいのありましたけどスルーで^^；
フクセンなので・・・。

> a href="http://nnnr2.net/novel.
org/rank07/ranklink.cgi?id="MrJ
"< ネット小説ランキング>現代FTシリアス部門>「フィール
ド・オブ・ジャステイス」に投票 >/a<
ネット小説の人気投票です。投票していただけると励みになります。
（月1回）

没落した英雄

「王城・騎士長自室」

「さて、どうするか・・・。」

フォンは翌日のデートのプログラムを作るため地図を広げた。王城から進むルートに印をつけながら、歩いている風景を思い浮かべる。

どこでどんな会話をするかもメモしていく。

しばらく地図と格闘していると、部屋の外で誰かの気配がした。廊下を行ったり来たりしている。

しばらくは無視していたのだが、何時間も同じ気配がしてくる。フォンは廊下に顔を出した。

しかし、誰もいない。

扉を閉めると再び同じ気配がする。

（確か魔道隊は今日召集があったな・・・。）

そんなところだと、フォンは再び地図と格闘を始めた。

「王城・魔具倉庫」

「あれ？」

リーデニスは召集命令により魔具倉庫に来ていた。

しかし、石で作られた倉庫には誰も居なかった。

「ん？あれ？こんなものあったっけ？」

それは記憶保存装置であった。

これは人の記憶を青白い光にコピーする装置である。物がよければ感覚もコピーされる。

（こんな高いの誰が買ったの？）

あ！そうか！今日はこれの処分でも決めるんだ。）

そんなことを考えていると、突然、装置が動き出した。

「！！！」

それに驚くと同時に後ろから誰かに押さえられた。

「くっ……だれ！！？」

必死に抵抗するが、腕を後ろに取られているので身動きができない。

「はなせ！はーなーせー！！！」

一瞬腕が解かれた。

しかし、すぐに四肢をつかまれ、石柱にたたきつけられる。

衝撃で息がつまり、目を閉じた。

「う……く……。」

痛みが和らいできた。

「……！！！」

リーデニスは目を開けて最初に写った人物を見て絶句した。

「明朝・7時」王城・騎士長室」

（どこにしまったかな……。）

フォンは朝早くから仕事部屋に来ていた。

今日は仕事ではないので鎧ではなく茶色いコートを着ている。

この部屋は基本的に事務の仕事をするときに使う。

フォンは昨日作った地図を探しにきてた。

一応、ルートは覚えているが、会話の話題は覚えていなかった。

昨晚、部下の騎士が用があるとかでこの部屋に地図と一緒に来た。

そして紛失したのだ。

（くそ……自分に嫌気がさしてくる。）

そのとき、騎士長室の扉が勢い良く開いた。

「フォン騎士長！！」

リーデニス魔道隊長殺害の容疑で逮捕します！！！」

数人の兵士がなだれ込んできて、先頭の騎士がそう叫んだ。

「なに？　どういうことだ？」

「本日明朝5時！　王城の水路にて、リーデニス魔道隊長の無残な遺体が発見された！　

その傷後から、凶器は巨大な剣であることがわかった！　

さらに！　昨日、場内でフォン騎士長！　あなたのアリバイがありません！　」

「それは誰が発見し、誰がそう推理した？」

「騎士長……私は、あなたがこんな形で人を殺すなど思いたくありません……」

「誰がそう推測した！！？」

フォンは叫んだ。

その勢いに、その場にいた誰もが硬直した。

重々しい空気が数コンマ秒流れた後、騎士は口を開いた。

「リーエー外交大臣……です。」

「今どこにいる？」

静かに、しかし、激怒を我慢していると言った声で問う。

「え……謁見の間に……」

それを聞いたフォンは王室へと向かった。

騎士長室に乗り込んできた兵士は、誰一人としてそれを止めることはできなかった。

（王城・謁見の間）

フォンは荒荒しく扉を開けた。

中へ入ると同時に8本の槍が向けられた。

「！！！！」

「逮捕しろ！！」

リーエーが叫ぶ。

そこには12人のすべての大臣と皇帝がいた。

「フォン……まさか、おまえが……」

皇帝は信じられないといった感じで云った。

11人の大臣も、重々しい表情でフォンをみる。

ただ一人、リーエーは笑っている。

「俺じゃない・・・俺は殺っていない・・・いや、そもそもリーデニスは本当に殺されたのか!？」

「ん？自殺だというのか？」

「違う！本当に死んだのかと聞いている!!」

すると眼鏡をかけた別の大臣が一步前に出た。

「ええ、そして、死体解剖の結果、あなたが背中に持っている剣が凶器であるとわかりました。

もつとも、同じ種類の剣だとわかっただけで、その剣が使用されたかどうかはわかりかねますが。」

「・・・。」

リーデニスの死が確定して、フォンはヒザをついた。

そこへ、リーエーが歩み寄る。

「取り押さえます。」

そういつて、手から青白い光を出した。

それをフォンの頭に当てた。

光はそのままフォンの頭に吸収される。

「!!!!」

いきなり目の前が真っ暗になる。

そして、別の人間の視点が脳裏に描かれた。

・
・
・
・

「くっ・・・だれ!?!？」

必死に抵抗するが、腕を後ろに取られているので身動きができない。

「はなせ!はーなーせー!!!!」

一瞬腕が解かれた。

荒い呼吸が静かな部屋に響く。

リーエーは声に出すことなく笑っている。

「連衡しろ。」

リーエーは後ろに下がり、8人の兵士が槍を向けたまま近づく。

「リーーーーーーエーーーーー!!!!!!」

フォンは背中の剣を抜き、一振りで向けられていたすべての槍を切った。

槍の刃は音を立てて大理石の床に落ちる。

兵士達は恐れをなして後退する。

フォンは目の前の兵士を突き飛ばし、リーエーに斬りかかろうとした。

しかし、それは叶わなかった。

足元に魔法陣が出現し、障壁が出現した。

「ふ。」

リーエーは勝ち誇ったかのように鼻で笑った。

フォンはリーエーを睨みつけると、その視線を皇帝へ向けた。

「陛下、この国を治めるのはあなただ、誰が何と言おうと、あなたが選んだ道を進んでください。」

そういうと、フォンは下元を剣で叩くように斬った。

足元が崩れ、下層に落ちる。

右手には、窓の開いたベランダが見えた。

フォンは迷わずそこへ走り、飛んだ。

「門を閉じるーーーーー!!」

門番に命令が下されるより早く、フォンは門を抜け、城下町へ出た。

真昼の城下町を、外門へ向けて一直線に走る。

すぐ隣を早馬が駆け抜けて行った。

外門へ着くと、そこには剣をこちらに構える兵が居た。

門は閉じている。

「くそつ。」

フォンは鞘ごと剣を構えた。

「覚悟ーーーー！！！」

兵士が切りかかってくる。

フォンはそれを受け止めずになぎ払った。

兵士の剣は見事に折れた。

自分へ向かってくる兵士の剣を叩き折る。

2・3人の兵士は目前に身体をさらしてきたので、横っ腹を叩いて吹き飛ばした。

木製の外門まで来ると、鞘から剣を抜いた。

「真空鎖斬！！！」

剣に空気がまとわり、強力な斬波が巻き起こる。

瞬間的に3回、門を斬った。

門は音を立てて崩れ落ちた。

なぎ倒された兵士達を背にフォンは平原を走った。

没落した英雄（後書き）

これは自信あり！

個人的に良かったと思います

これは今後の物語の展開として非常に大事な部分です

そういう意味でよくできたと思います

今後に期待してください！

もしよければ感想や評価の方、よろしくおねがいします

木漏れ日の天使

「はぁ・・・はぁ・・・。」

フォンは夜になるまで走り続けた。

もう、どれだけ走ったのかわからない。

気がつけば、王都の周りにある平原を抜け、ヴァリクラを囲むように連なるヴァリクラ山脈のフモトに居た。

この山を越えればヴァリクラを離れる。

今となつては覚えのない罪で犯罪者となつた英雄は、国を出る勇気がなかった。

家と職と名誉と恋人を奪われたにもかかわらず、フォンは、まだヴァリクラ帝国に思い入れがあつた。

しかし、立ち止まっていては追つ手が来る。

林の向こうにチラつく光はおそらくソレだ。

しかたなく、フォンはフモトに沿って進んだ。

またしばらく時間が流れた。

疲労と精神的な苦痛が足に及び倒れこむ。

抵抗することもできずにフォンは眠りについた。

何か、暖かいものに包まれるかのように・・・。

「翌日」

フォンは日の光に照らされて起床した。

といつても、まだ身体は動かすことができない。

「おはようございます。」

誰かわからないが、やさしい声が聞こえた。

「ああ・・・。」

フォンは反射的に返事をした。

誰かが仰向けに寝ている自分の顔を覗き込んでいる。

しかし、逆光で顔まではわからない。

やけに長い髪が、頬をかすめてくすぐつたい。

目がだんだん慣れてくる。

そこで見たのは金髪の長い髪の少女だった。

年は16か17といった感じだ。

「・・・！！！」

思わずフォンは飛び上がる。

頭の下にはその少女のヒザがあつたのだ。

「誰だ・・・！？」

できるだけ冷静に聞いた。

しかし、表情に同様が出ているのか、少女は静かに笑う。

「私はリンネ、リンネ・アドランスです。」

少女はゆっくり起き上がりながら言った。

「あなたは・・・誰ですか？」

ゆっくりした口調で少女は問う。

「・・・。」

「？」

フォンは口を閉ざす。

今ここで、この国で名乗るのはやめたほうが賢明だと判断した。

フォン・カマスティンといえは顔は知らずともヴァリクラの国民なら誰もがその名を知る大英雄だ。

そして、同時にもっとも知名度の高い犯罪者・・・と言うことになる。

ここで名乗れば状況が悪くなるのは目に見えている。

「そうだ。」

少女は笑顔で手を胸の前で合わせながら云った。

あくまで口調はゆっくりだ。

「お昼ご飯、たべますか？」

「昼？」

フォンは空を見上げた。

木の枝にさえぎられた太陽が青空の頂点で輝いている。
どうやら昨日の晩から今の今まで眠っていたようだ。

「ここは、どこだ？」

フォンは少女を見ずに聞いた。

「記憶喪失ですか？」

「まあ、そんなところだ。」

「ここは、ヴァリクラってお国の南にある、アーシャ村っていうところですよ。」

フォンは脳裏に地図を描く。

アーシャ村ということは王都から大分離れた場所だ。

そもそもヴァリクラという国は横には広いが縦には短い。

南に下ってきたのは正解だ。無論、結果オーライではある。

「ところで、君はどうして俺の頭のしたにヒザを？」

「え？もう、昨日のことも忘れたんですか？」

アナタが、ヒザの上に頭をのせたんですよ？」

「は？」

リンネは笑顔で言う。

しばらく、時空は凍結状態におちいった。

その凍結を解凍したのはフォンだった。

「どうして、こんなところに？」

「え？だって、ここが私のお家ですから。」

そういつてリンネは地面を指す。

そこには質素なじゅうたんがしかれているだけだった。

「ホームレス・・・？」

「えっと、まあ、そんなところですね。」

あ、でも雨風はこの魔法陣で防げますよ。」

リンネはじゅうたんに刺繍された魔法陣を指差す。

リンネはびしょ濡れになったフォンを見て笑った。
しかし、不思議と嫌な気分にはならない。
フォンもつられるかのように小さく笑った。
フォンに白くて小さな手が差し伸べられる。
「服を乾かす間、ゆっくりしてってください。」
リンネは笑顔でフォンに手を差し伸べながら云った。

木漏れ日の天使（後書き）

キャラクター紹介

名前 フォン・カマスティン

クラス 騎士

幼いころ住んでいた町を謎のモンスターに襲撃され、唯一生き残った少年。

その後、応援にきた当時の騎士長の養子となる。

戦争で騎士長が戦死し、その後をついで帝国騎士団に入団。

入団してすぐその頭角を現し、わずか6年で騎士長になりあがった。しよっちゆう物をなくす。

指名手配

「ヴァリクラ王城・王室」

「父上！」

まだ14歳の幼い皇女が皇帝へ駆け寄る。

「フォンさまが殺人を犯したとは本当ですか!？」

「・・・。」

皇帝は黙っている。

「あのフォンさまがそんなことするはずがありません！」

ましてや、婚約なさっていたリーデニスさまを殺害するだなんて・・・

「!」

「ニアス・・・。」

「父上？」

皇帝は皇女の肩に手をそえる。

「あのフォンが殺人などするはずがない。」

その瞳は言葉以上にフォンの無罪を主張していた。

「アーシャ村」

「もうお洋服のほうは乾きましたよ。」

「すまない。」

「いいえ。」

リンネは笑顔で畳まれた服を手渡す。

スープを飲んでいた手でそれを受け取った。

「世話になった。」

「もう行くんですか？」

「そのつもりだが。」

「そうですね・・・。」

「どうかしたのか？」

「いえ、では。」

フォンが立ち上がるのにあわせてリンネは立った。

「この村から南に下ると……。」

「イカスネ村だ。」

「ふふ、私よりも詳しいですよね。」

「いや、土地勘というのは地図上では図れない。

その土地に長く住んでいる者のほうが有利だ……戦場でもな。」

「私は……ここに住んでまだ数週間ですよ?」

リンネは笑みを絶やさず話す。

そんな少女につい見とれてしまう。

その容姿はやわらかで、日にあたって輝く長い金色の髪は神々しい。

「数週間?」

「はい、私、ここのお国の人間じゃありませんので。」

「……。」

違法移住者か……。」

「お役人に預けます?」

「今の俺にはそれはできない。」

「あら、どうしてですか?」

リンネは変わらず笑顔だ。

その表情からは、何も読み取れない。

「あんた……俺がわけありってわかってたのか?」

「真夜中に走ってくるんですもの。」

普通の人じゃ、ないですよね。

でも、私、結構人を見る目があるんですよ?」

「じゃあ、俺はどう見える?」

「ん……何人も人を殺めてらっしゃいますよね?」

「ああ……。」

「ほら当たった。」

絶えぬ笑顔で話す。

本当に純粹に推測が当たって喜んでいるようにしか見えない。

「あんたには・・・俺が婚約者を殺した犯罪者に見えるか？」
「見えます。」

即答だった。

その言葉を口にしたとき、彼女の笑顔はなかった。

「でも、あなたが直接殺したわけじゃ、ないですよね？」

「どういうことだ？」

「直接殺したのはアナタじゃない。

でも、婚約者のかたが殺されたのはアナタのせいではないのですか？
ヴァリクラの英雄さん？」

「俺の・・・せい？」

「・・・いや、そもそも俺が誰かわかっていたのか？」

「もちろんです。」

その言葉をきっかけに、リンネに笑顔が戻った。

「・・・。」

「どうか、なさいました？」

「いや・・・それじゃあ俺は行かせてもらっ。」

「そう・・・ですか。」

リンネはなぜか寂しそうになる。

そして、はるかかなたを見つめる。

「それではお別れですね。

さようなら。」

笑顔で、しかし、寂しそうに云う。

「あんたも気をつけろ。」

「ありがとうございます。」

フォンはゆっくりと南へ足を進めた。

（アーシャ村・南の門前）
何かが引っかかる。

それは、このまま村を出てはいけないという第六感からの忠告。ふと、後ろを振り返る。

村人が活気に満ちている。

この村では農業が盛んだ。

ここの市場には新鮮な果実が置かれている。

すると、一人の若者が走ってくる。

「大変だ！！王都から軍が！！！」

フォンはそれを聞いて駆け出した。

くアーシャ村・北の門前く

「貴様・・・この国の者ではないな。」

「あら、よくお分かりになりましたね。」

「その服・・・ガンデスか・・・。」

3人の兵士のうち、一番後ろの兵士が答える。

その兵士がリンネの前に立つ。

「国籍手帳をお持ちですか？」

「申し訳ありませんが、それは持っていないです。」

「そうですか・・・では、ご同行願います。」

「重なつて申し訳ないのですが、私はここから動くつもりはありません。」

「この国では公務執行に賛同しない異国者は切り捨てることができます。てしまいます。」

私としては、そのようなことはしたくありません。」

「どうして、そんな法律があるのですか？」

「乱世だからですよ。」

「そう・・・ですか・・・。」

悲しい世の中ですね。」

「まったくです。」

「・・・。」

「ご同行・・・なさらないのですね？」

「ごめんなさい。」

兵士が剣を鞘から抜いた。

大きな動作で剣を振りかぶる。

リンネはゆっくりと目を閉じる。

「お覚悟を。」

剣は空を切って振り下ろされた。

轟音ともいえる悲鳴のような音が響く。

リンネはその音に驚いて目を開く。

「あなたは・・・！」

「っ・・・！」

フォンは鞘で剣を受け止めていた。

兵士は同様している、それを見逃さず剣を押し返す。

「立てるか？」

「え？あ、はい。」

「逃げる準備をしろ。」

「え？しかし・・・。」

「早く！！」

フォンは怒鳴る。

「騎士長・・・。」

「なに？」

「騎士長！！」

3人の兵士はヒザをついた。

「お探ししておりました。フォン騎士長！！」

フォンは構えていた鞘を下ろす。

「騎士長！どうか、王都へお戻りください！」

「どういう意味だ？」

「はい、先日、騎士長が殺人の容疑で指名手配されました。

しかし、我々を含め、多くの者は、それが偽りであると信じております！」

「・・・。」

フォンは鞘を剣に戻す。

「騎士長！王都に戻られ、正当な場で無実であること証明してください！」

「悪いが、それはできない。」

「何故ですか！！？」

すると、いままで黙っていた兵士が口を開く。

「騎士長！あなたが無実であることも、リーデニス殿がハカリゴトによって命を落とされたことも皆が知っています。」

しかし、騎士長がそれを公開して下さらねば、我が同胞は・・・。」

「すまない・・・。」

「騎士長・・・何故ですか！！？」

「コレは俺を良く思わない連中がおこした罠だ。」

そいつらは・・・あまりにも巨大だ。

今戻っても、証拠がないかぎり、何も変わらない。

俺の処刑は現時点で確定しているも同然だ。」

「騎士長！何を弱気な！！」

我らはその怨敵よりも弱小ということですか！！？」

「残念がらな。」

「しかし、我々は騎士長から受けた恩を忘れてはいません！！

この命、いつでも騎士長にささげる覚悟！！！」

「気持ちはいりたい、しかし、今は戻れない。」

「そんな・・・。」

「しかし、必ず俺は戻ってくる。」

それまでお前達は俺の代わりに陛下をお守りしろ。
敵の狙いはおそらく国。

陛下には一応助言してはいるが、ヤツラは陛下を亡き者にせんとハカリゴトを企てるだろう。

だから、俺が戻るまで、どうか陛下を守りきってくれ。」

「騎士長・・・了解しました。」

3人の兵士は立ち上がると敬礼する。

「アシユレッド・バニアス、騎士長閣下の命により皇帝陛下のお守りにの任につきます！」

「ヴォイス・アーノルド、騎士長閣下の命により皇帝陛下のお守りにの任につきます！」

「ミオーノズ・ガルバシュ、騎士長閣下の命により皇帝陛下のお守りにの任につきます！」

「頼む。」

3人の兵士は振り返り、王都へと戻っていった。

「すばらしい上官だったんですね。」

「俺がよかったんじゃない、部下の人柄が良いんだ。」

「そのようですね。」

リンネはクスクス笑う。

「助けてくださって、ありがとうございます。」

「どうしてここを動かなかった？」

「ここは・・・私の生まれた場所、なんです。」

死ぬときはここがいいと思って・・・それで。」

「そうか、では行こうか？」

「え？」

「死ぬときはここへ来ればいい、しかし、あんたはまだ死ぬべきじゃない。」

「どうして、そう思うんですか？」

「勘だ。」

「勘？」

「ああ、戦場では、意外に勘でどうにかなることがあるんだ。」

フォンはリンネに手を差し伸べる。

「俺とともに来てはくれないか？」

「借りも返したい。」

「・・・」

殺人罪の次は浮気ですか？」
リンネ笑いながら手を取った。
「よろしくおねがいします。」

指名手配（後書き）

感想おまちしております。

迷いの森の狩人

イスカネ村はアーシャ村から南東に進んだ場所に位置する。

そこへ行くには国内最大級の樹海<ラーホネットの森>を抜けなければならぬ。

このラーホネットの森は別名迷いの森と言われており、まったく同じように育つ大木<ラーホネット>がみだらに立ち並んでいる。

「ここは息がつまるな・・・。」

フォンは鼻を押さえながら云った。

「そうですか？」

「ああ・・・臭わないのか？」

「ごめんなさい、私今風邪気味で、鼻が利かないんです。」

「そうか・・・ある意味そのほうが幸せかもしれないな。」

ラーホネットは悪臭とまではいいかないが、独特の臭いを放つ。

ラーホネットの木は魔具を作る際にはかかせない木だ。

それは、ラーホネットが放つ独特の臭いが炎にあらゆる追加効果を与えるからである。

追加効果を与えられた炎で鍛えられる鉄にも、同様の効果が出るのだ。

しばらく進むとラーホネットの森を抜けた。

迷いやすいといっても一直線に進めば迷うことはない。

それでも、この森が迷いの森と言われるのはこの樹海の第二層<レネゲイルの森>が存在するからである。

レネゲイルの木はラーホネットとは逆に、個々がまったく違う育ち方をする。

入り組まれたこの森は一直線に抜けることができない。

しかも、このレネゲイルはラーホネットの臭いを感知すると動き出すのだ。

風向きが悪ければ、この森を無傷で抜けるのは不可能である。幸い、今日は風はない。

しかし、今放たれている体臭はラーホネットのソレだ。鼻の利くレネゲイルに近づけばどうなるかわからない。慎重に進む必要がある。

「ち……。」

案の定、ところどころの木が動く。

道行く道は姿を変え、何通りもある迷路のゴール地点はまだまだ先だ。

「なんとかならないのか……。」

「あの、あのあたりの木は枯れているみたいですよ？」

「そうか、極力枯れているところを進むか。」

枯れたレネゲイルの上を進んでいく。

長い時間を経て、二人はレネゲイルの森を抜けた。

あとは最終層である森を抜けるだけだ。

この森は様々な木が立ち並ぶ、いわば普通の森だ。

足元はドロドロの泥だが、レネゲイルの森よりも歩きやすい上にラ

ーホネットの森よりも清々しい空気が漂う。

「おお！」

突然、上空から声が響いた。

「誰だ？」

フォンは静かに剣に手をやる。

すると、木の上から誰かが降りてきた。

手には、弓がある。

腰に矢束をぶら下げている。

「オイラ、フォン騎士長にあこがれてたんだ！

あんた、フォン騎士長だろ！？」

その少年はキラキラした目で云った。

「そつだが……。」

「やっぱりな！オイラの目は節穴じゃなかったぜ！！」

少年ははしゃぐと、いきなり額を地面につけた。

「頼む！オイラを隊にいれてくれ！」

あ、いや・・・入れてください！！！！」

「いや・・・。」

「嫌？」

「そうじゃなくて・・・だな・・・。」

フォンは戸惑う。

すべてが突然すぎて、穩便に話を進めるにはどうしたらよいのかさっぱりわからない。

「君、名前は？」

「すまねえ、オイラはウルムってんだ。」

「ウルム君ね。私はリンネ、よろしくね。」

どうしてウルム君はここに居たの？」

「オイラホームレスでさ、ここがオイラの家なんだ。」

「ホームレス？」

家出したのか？」

「いや・・・オイラの家族は殺されたんだ・・・でも！フォン騎士長が仇をとってくれたんだ！！」

なるほど、とフォンは納得した。

怨敵を打ち滅ぼした恩人なら、自らをその配下に加えてくれと頼むには十分な理由だ。

「・・・。」

フォンはしばらく考え込んだ。

この手の事は、たとえダメだといっても無駄だ。

しかし・・・。

「俺は今や殺人犯だ。」

「知ってるさ！オイラはフォン騎士長のファンっだぜ！？」

ファンって・・・。

と小さくツツコム

「でも！オイラ、騎士長がリーデニスさんを殺すなんて思えないん

だ！

きつと、誰かが罪を擦り付けたんだ・・・。

そうだな・・・リーエーとかは、騎士長のこと恨んでるけど・・・。」

「！！！」

「ん？フォンさん？

どうしました？」

「いや・・・ウルムと云ったな。」

「はい！」

「俺はおまえの保護者じゃない。

着いて来たいならそうしてくれてかまわない。」

「本当ですか！！？」

「やったああああ！！！！！」

ウルムははしやぎまわる。

「どうかしましたよね？」

リンネはフォンの顔を覗き込む。

「リーエー・・・ソレを含む大臣達や皇帝陛下の本名は公表されてない。

それを知っているということは・・・。」

フォンは後ろを振り返る。

追っては来ていないようだ。

どうやらあの三人がうまくごまかしているようだ。

「ウルム。」

「はい！なんですか？騎士長！！！」

「あ・・・そのまず、騎士長はやめてくれ。」

「どうしてですか？」

「いや、変換しづらい・・・じゃなくて、俺はもう騎士長じゃない。フォンでかまわない。」

「じゃあフォンの兄貴と呼ばせてください兄貴！！！」

「（さっそく呼んでるじゃないか・・・。）」

ああ、それでかまわない。

ところで、リーエーの名をどこで知った？」

ウルムはフォンの前にビシッと立つ。

「オイラの家は元々貴族で、国の裏の情報を扱っていたんだ。だから、少なからずオイラもそれに目を通しているんだ。」

「そうか……。」

「いつでも聞いて下さい！オイラが覚えていることならなんでも話やすー！」

「じゃあ……リーエーとつるんでいるヤツラに、どんなのが居る？」

「つるむ？」

「仲良しって意味よ。」

さりげなくリンネがフォローする。

「ああ！え」と……シルヴァとかケリシリスとか……。」

「そうか。」

「どういう方々なんですか？」

そのシルヴァとかケリシリスって人。」

「シルヴァは文部大臣。ケリシリスは王族医師だ。」

（シルヴァとケリシリスなら、嘘の診断書も作れる……。もしかしたらリーデニス……。）

フォンは歩き出した。

「行こう。」

「ちょっと待ってください。」

リンネはフォンを呼び止める。

「そのシルヴァって人とケリシリスって人ならリーデニスさんの嘘の診断書を書けるのでは？」

「確かに、文部大臣と医者なら……。」

ラルムは腕を抱え込む。

「わかつているさ。」

「では、王都にもどらないのですか？」

「・・・。」

「兄貴！もしかしたらリーデニスさんを救えるかもしれないですよ！！？」

「しかし。」

「しかし、なんですか？」

リンネは前に歩み寄る。

「まだ生きているかもしれないなら、確かめに行くべきです！」

「わかっている。」

「じゃあどうして？」

「この状態で戻るのは自殺行為だ。」

フォンは自分の身体を指差し、反対側の手で袋を持ち上げる。

「あ。」

「食料なし、身体はもうボロボロだ。」

一度イカスネ村で補給してからだ。」

「そお・・・ですね。」

先走った行動をした自分を恥じるようにリンネは顔を隠す。

「だったらオイラにまかせてくれよ！」

あそこはオイラの第二の故郷なんだ！

いい宿を紹介しやすぜ！！」

ウルムはそう云って進みだした。

迷いの森の狩人（後書き）

「騎士長」って一回で変換すると「喜志町」になるんです><
だから「きし」と「ちょう」で分けないといけないので非常に面倒です。

え？「ケリシリス」って名前の方がメンドウ？

大丈夫！彼（？）は今後滅多に登場しません^^ノ

ツルギのボヒョウ

フォン達は迷いの森を抜け、イカスネ村の宿を取った。

ここイカスネ村には世界でも有数の温泉の観光名所である。

ヴァリクラの南東からシュリベラの全土にかけて巨大なアラネス力造山帯が連なっており、

数多くの活火山とともに温泉が湧いている。

「イカスネ村・黄金温泉亭」

「なるほど、確かにいいところだな。」

フォンはウルムに案内され、イカスネ村の温泉宿の一室で羽をのばしていた。

「そうですね、温泉も気持ちよかったですね。」

リンネは宿を取って早々に露天風呂に入っていた。

「だろだろ？」

この女将はオイラの家の古い親戚でさ、たまにここの風呂に入れてもらってるんだ！」

「ん？つということは、ここの女将は貴族ということにならないか？」

「んゝ、よくわかんねえけどさ、なんか色々あるらしいんだよなあゝ。」

「いいじゃないですか、

今日はゆっくりしましょう。」

リンネの提案におとなしく従う。

わざわざ宿を取ってまで神経を使っているのは先が持たない。

「それじゃあ俺も湯に預かるとするか。」

フォンが部屋を出た。

（翌朝）

「イカスネ村・北門」

「準備はいいな。」

フォンは村の門前で荷物を確認する。

「お薬に、食料、水……はい！全部いいですね。」

「んじゃあ目指すは王都シューデン！」

ウルムが大声で歩き出した。

「迷いの森・南口」

「さて。」

フォンは気を引き締める。

「このあたりにはラーホネットはないから、レネゲイルあたりは簡単に抜けるだろう。」

「え？」

ウルムが意外そうな声をだす。

「兄貴達、上を抜けてきたのか？勇者だな……。」

「ん？どういことですか？」

「この森には地下通路があるんだよ。」

「こっちこっち！」

ウルムは獣道へと入っていく。

フォン達はその後に続いた。

「王都シューデン・外門」

森の地下通路を抜けた先は王都のすぐ近くの坑道だった。

「おそろしく早く着いたな。」

フォンは呆れ口調になる。

朝早くに出発し、翌日の夕方に王都につく予定だったが、出発したその日の昼過ぎには到着した。

「ここは元々貴族が国外に亡命するときに使ってたらしいんだ。」

「すごい！さすが国の情報を扱ってた貴族の末裔ですね！」
リンネは感心する。

「まったくだな。」

この門のは通路で城までつながっている。」

そういうとフォンは門の外れにある小さな隠し扉を開く。

「なんか・・・隠し通路ばつかな・・・。」

「そんなもんさ、世の中なんてな。」

3人は通路へ入っていった。

「シューデン隠し通路」

中は薄暗い一本道だった。

盗賊用の罠もいくつかあり、それを解除しながら進む。

外と完全につながっていなかったため、虫一匹存在しない。
ほどなくして、城下町の一角へ出た。

「王都シューデン」

「ここから先は俺が行く。」

「そんな！兄貴一人だなんて・・・。」

「ここから先は危険だ。」

道を知らないならなおさらだ。」

「でも！！」

「ウルム君。」

リンネがウルムの肩に手をやる。

「姉御・・・。」

「私たちじゃあ足手まといだから・・・ね？」

「・・・わかった。」

リンネはフォンを見る。

フォンは表情でくすまない>と謝る。

それがわかったのか、リンネは微笑む。

「そうだ、ついでだからコレを買っておいてくれ。」

フォンはメモを渡した。

それは、リーデニスが欲しがっていた宝石だ。

いつもはそれほど物を欲しがらないリーデニスが、やけにほしがっていた物だった。

「了解です。騎士長殿！」

リンネはいつもの笑みのまま敬礼する。

「行ってくる。」

フォンは隠し通路へ進んだ。

「王城」

「・・・。」

フォンは見張りが居ないことを確認して通路に入る。

あの晩、リーエーに見せられた記憶を頼りに通路を進む。

場所は魔具倉庫、そこへ行けば何かかわかるかもしれない。

ほどなくして魔具倉庫にたどり着く。

鍵を壊して中に入る。

そこには血痕以外何もなかった。

「もし、生きているなら・・・地下監獄か・・・。」

フォンは倉庫を出た。

突然、目の前に兵士たちが現れた。

「人殺しの次は窃盗ですか？」

そこに立っていたのは。

「シルヴァ・・・やはりお前も・・・。」

文部大臣シルヴァが兵士たちの中心に立っていた。

「勘が良いのか頭が回るのか・・・さすがに鋭いですね。あなたは。」

「

「悪いがまだ確認することがある。」

フォンは鞘ごと構え、目の兵士をなぎ払う。

「追いなさい。」

シルヴァはフォンを指差す。

兵士たちがフォンの後を全力で追いかける。

しかし、兵士達は重い鎧を着けているのに対し、フォンはコートと軽い服装だ。

さらに体力の差もあり、フォンはすぐに兵士たちを振り切った。それでも息は上がる。

しかもここは敵のテリトリーだ。

他の兵士たちと鉢合わせになり、出会った全員を気絶させる。

「はあはあ・・・くつ。」

しばらく走った後、フォンはようやく監獄までたどり着く。

扉を打ち破り、階段を下りて牢獄を抜ける。

牢獄のさきは魔法牢獄。

部屋全体に魔法陣がはってあり、魔導師を閉じ込めておく場所だ。

フォンは魔法牢獄の扉を破る。

魔法陣が輝いている。

この魔法陣は対象を決定しないと効果を発揮しない。

魔法陣の光の向こうに鎖につながれた人影があった。

「リーデニス・・・？」

フォンはゆっくり歩み寄る。

剣を鞘から抜き、鎖を断ち切る準備をする。

魔法陣の中心にいくと、剣の能力により魔法陣が解除された。光がゆつくりと地に引いてく。

そしてその人影は肉眼ではつきりわかる姿になっていく。

「リーデ・・・ニス・・・。」

フォンは剣を床に突き刺し、ヒザを着く。

そこにつながれていたのはリーデニス・・・の死体だった。

あの夜見た服装のまま、あちこちを切り刻まれている。

「リーデニス・・・。」

荒い息遣いでフォンは、リーデニスの亡骸をすぐるようにつめる。

兵士たちが部屋に流れ込んでくる。

兵士達はフォンの腕をつかむ。

「リーデニス！！リーデニス！！！！」

フォンは亡き恋人の名を呼び続けた。

「リーデニス！！！！！！！！！！」

兵士たちはフォンを魔法監獄から連れ出す。

剣が、まるで墓標のように突き刺さっている。

「フォン元騎士長の身柄を拘束しました！」

兵士はシルヴァに報告する。

「明朝の公開処刑まで牢獄に入れておきなさい。」

「は！」

兵士は敬礼すると走り去った。

「ヴァリクラの英雄・・・最期はあつけないものですね。」

「・・・・。」

フォンは牢獄の片隅で冷たい床を見つめている。

もう、何時間もたつ。

すでに、小さな窓からは月が見える。

コツコツと誰かが歩いてくる。

その足音はフォンの牢獄の前で止まる。

フォンはゆっくりと顔を上げた。

「・・・・貴様・・・・。」

にらみつけるようにその男を見る。

「・・・・。」

男はゆっくりと腰に手をやり、鍵を取り出す。

そして、無言で扉を開けた。

「着いてこい。」

男の顔が月明かりに照らされた。

「どっとうつもりだ・・・ケリシリス。」

ツルギのボヒョウ（後書き）

結構いい感じに話が進んでいる気がしますですよ。はい。
焦らずゆっくり、良い内容を更新していこうと思います。
感想・評価はヤル気につながります！

皆様よろしくおねがいしますm（――）m

それぞれの正義

「王都シューデン」

フォンとケリシリスは闇夜の王城を走る。
もと来た隠し通路を走る。

「まて！」

「どうした？」

フォンはケリシリスを呼び止める。

「城下町に用がある。」

「そんな時間はない。」

おまえは一刻も早くここを逃れる。」

「あんたに指図されるいわれはない。」

フォンは扉に走りよる。

「・・・。5分だ。」

フォンは扉を勢いよく開く。

「わ！」

「きゃ！」

開けた瞬間にリンネとぶつかった。

「すまない。」

「フォンさん！」

よかった！無事だった！」

「兄貴、遅かったじゃないですか！！」

「すまない。」

フォンはもう一度謝る。

「リーデニスさんは・・・？」

リンネは注意深く聞く。

「・・・。」

「ごめんなさい・・・。」

「何故あやまる？」

「だって、私が確かめようなんて・・・また、フォンさんにつらい
思いをさせてしまいました。」

「そんな！姉御は悪くねえ！オイラが変なこといったから・・・。」
「お前たちのせいじゃない。」

ウルムは貴重な情報を教えてくれた。

リンネが言わなくとも俺はここへ戻ってきている。」

「まだか？」

扉からケリシリスが現れる。

「・・・。」

行こう、ここにはもう用はない。」

「はい。」

「うん。」

フォンは通路に戻る。

その後ろを三人が追いかける。

「イカスネ村」

フォン達は坑道の隠し通路を抜け、イカスネ村まで戻ってきた。
ここまでほぼ全力で走ってきたため皆息が上がっている。

まだ、夜は明けていない。

「・・・。」

「！！！！」

フォンはイカスネ村の門を過ぎたところでケリシリスの胸倉をつか
んで壁に叩きつける。

「ぐっ。」

ケリシリスは息を詰まらせる。

「フォンさん！」

フォンは険しい表情でケリシリスに問いかける。

「おまえに聞きたいことがある。」

「おまえの推測の半分は間違っている。」

「何？」

フォンは表情を変えない。

「おまえに俺が何を考えているのかわかるのか？」

「わかるさ。」

「わかるわけがない!!」

もう一度ケリシリスを壁に叩きつける。

「っ……！」

わかるさ。

あんな派手な逃げ方しておいて、ノコノコ王都に戻ってきたのが証拠だ。」

「どういう意味だ？」

「リーデニスの死因……あれは魔法によるものだ。」

「……。」

フォンはゆっくりとケリシリスを離す。

「確かにリーデニスはひどい仕打ちを受けたようだ。

それは君が一番よくわかっているだろう？」

「結論を教える……。」

「……リーエー以外に……あるいはリーエーの裏に何かが居る。」

「

「どういうことですか？」

リンネがわってはいる。

「リーエーは魔法を使えない。

そして、知れているかぎりでは、リーエーの周りに魔法を使える人間はいない。」

「なあ。」

ウルムは前に出る。

「アンタさ……どっちの味方なんだ？」

「……そうだな。騎士長派だ。」

「では何故ウソの診断書を書いた？」

俺が知っている内容では・・・俺に斬り殺されている。」

「ああ、時間が必要だった。」

おまえにこの事実を教えるために。

リーエーに命令された。

あそこで首を縦に振らなかつたら殺されていただろう・・・。

結果的に、おまえが王都に戻ってきてくれたのは正解だった。」

闇の向こうにチカチカ光がちらついている。

「追ってか・・・後をつけられていたようだ。」

ケリシリスは腰のレイピアを引き抜く。

「ここは引き受ける。」

「おまえ・・・一体何がしたい？」

「云っただろう。」

俺はおまえ派だ。

・・・国境の向こうにアドランスという医者を目指す軍師が居る。」

「！！」

「リンネ？どうした？」

「いえ・・・何も・・・。」

「・・・。」

それで？

何故その名をだす？」

「ああ・・・実際にあったことはないが、少々文通していた仲でな、おそらく手助けになるだろう。」

ガンデスのミレルという港町だ。」

フォンは歩き出す。

「信じていいんだな？」

「ああ・・・約束してくれ。」

「？」

「この国を・・・頼む。」

「アンタもな。」

フォンはもう振り返らず、歩き出した。

「あの・・・ケリシリスさん。」

「何かな？」

「お元気で・・・。」

「君の名前は？」

「リンネです。」

「・・・そうか・・・何の因果だろうな・・・君は？」

ケリシリスはウルムを見る。

「ウルムだ。」

「ウルムか・・・。」

二人とも、フォンを頼む。」

リンネは一礼してフォンを追いかけた。

その後をウルムが慌てて追いかける。

「ケリシリス・・・。」

そうですか・・・あなたが元騎士長を・・・。」

「ほお・・・シルヴァ自ら来てくれるとは・・・光栄だ。」

ケリシリスはシルヴァにレイピアを向ける。

それをさえぎるように兵士が一歩前に出た。

「犯罪者を・・・いえ、生け贄を何故？」

「その話を持ち出すか・・・なるほど、この兵士達はリーエー派か。」

シルヴァが眼鏡をかけ直す。

「この国をリーエーは正そうとしている。

何故あなたはソレがわからないのです？」

「この国の英雄を奈落の底へ突き落とすことが正しいのか？」

「物事に犠牲はつきものです。」

国は皇帝にあらず、そして、皇帝は国にあらず。

国は国、皇帝は皇帝。

なのに、この国は一人の将に頼っている。

それはほかならぬ皇帝だ。

リーエーは、国のあるべき姿を取り戻そうとしているのです。」

「その代償が国の基盤を築いた英雄の処刑か？」

「たった一人の犠牲が国の繁栄へと導かれる。」

「一人？すでにリーデニス嬢を殺害し、皇帝陛下の殺害をも目論む貴様らがよくそんな口をきけたものだ。」

「国のため、しいては一億四千万人の国民のためです。

あなたに彼らの幸せを妨害する権利が？

この国は腐敗しかけている。リーエーはそれを正すために動き出している。

どちらが正義がよく考えなさい。」

「ひとつ同意しよう。」

この国は確かに腐敗している……。

皇帝陛下に忠誠を誓えないクズが一国の大臣なのだからな……！」

ケリシリスはレイピアに刻まれている紋章を発動した。

レイピアが光だす。

「反乱が正義なら、世は末だな！シルヴァー！！」

「反乱ではない！革命です！何故それがわからない……？」

シルヴァは下がる。

兵士たちがケリシリスに詰め寄る。

『死神の使い魔よ、その姿を武器とし、陽炎に操られ肉を引き裂け！！エターナルシャドウ！！』

兵士たちの影がレイピアの光を受けて浮かび上がる。

そして影から無数のトゲが現れ、兵士に突き刺さる。

「ぐあああ！」

魔法を受けた兵士は激痛のため気絶する。

「その紋章……正気か？」

それは……まさか……！！」

「ほお、さすがに賢者と言われるだけのことはあるな。

そう、これは術者の命を源とする紋章。

大義はフォンにある！！

この国には邪魔者が多いだけだ！

供にこの国の未来のために消えようか！我が友よ！！！！」

「やめろ！やめろ！！」

『我は汝にささげよう、この身を、この魂を・・・すべてを飲み込む暗黒の世界の礎として・・・！！』

「全員さがれ！！」

シルヴァが慌てふためくを見てケリシリスは笑む。

『開かれよ！虚無の扉！！デイメンシヨ・・・ぐ！！』

ケリシリスは最後まで詠唱することができなかった。

その胸には刃が3本突き出していた。

ケリシリスは倒れこむ。

吐血し、そのまま息絶えた。

「あゝあつけね！

へボが刃なんてもっちゃダメでしょ！め！」

男は子供をしっかりとつけるように亡骸に云う。

「・・・リュオか・・・。」

「んもうゝリーエーっちが早く行けっつから飛ばしてきたのに手ごたえなさすぎ！

おれっち欲求不満。何かない？」

「元・・・騎士長なんてどうですか？」

「お！いいねえ！お国の英雄さん？

いいんじゃない？どどこぞ？」

リュオはキヨロキヨロあたりを見渡す。

「この村には居ないでしょう・・・早めに追いつけば出会えるかもしれないよ？」

「おっけーい、あ、でも今日はお休み。

だってえゝ飛ばしてきたから疲れちゃった。

温泉はいろゝ」

リュオは陽気に歩きながら宿へ向かう。

兵士がシルヴァに歩み寄る。

「何者ですか？あいつは。」

「変わり者ですよ……。」

シルヴァはケリシリスの亡骸に近寄る。

「あなたと……共にこの国の未来を見たかった……友よ、我々が正義であることを証明しよう。」

天で見届けてくれ。」

シルヴァは王都への帰路へ入った。

それぞれの正義（後書き）

今回はここまでの話のヤマみたいなものです。

次の話からまた心機一転していきます。

感想を書いてくれると光栄です！励みになります！
どうかよろしくおねがいします！！

陽気な鍛冶師見習い

「ヴァリクラ南東の平原」

フォン達はिकासネ村を早々に抜け、国境の町アヴァナンに向かっていた。

この平原にはモンスターが多く、一般人がここを通ることはまずない。

案の定、モンスターが目の前に現れる。

それは熊に似たモンスターだ。

「行くぜ！」

ウルムは弓に矢を装填する。

リンネは一步下がり、フォンは剣を取る……予定だった。

しかし、予定は未定とはよくいったもので、フォンの拳は空を握る。

「あ。」

「「え？」」

「しまった……忘れてきた。」

そう、フォンの剣は魔法牢獄に突き刺さっているのだ。

フォン以外のモノはあの剣を持てない以上、現在もまだ魔法牢獄にあることになる。

ここまで来てフォンの特殊能力なくす>が発動してしまったのだ。िकासネ村にも剣は売っているが、急いでいたうえに夜中だったので買っていない。

「兄貴が戦えないってことは……オイラー人……？」

「あ！私、簡易魔法なら……。」

一瞬、静かな時間が流れ、間合いに風が吹く。

「へ……へへ……いいぜえ！やってやる！！」

安心してくれ兄貴姉御！！オイラがアヴァナンまで連れて行つてやるぜ！！」

ウルムは装填していた矢をはずし、槍のように構える。

「うおおおおお！！！！！！！！！！」

ウルムはモンスターに突っ込んだ。

||
ア
ヴ
ア
ナ
ン
||

「ご苦労様です。」

リンネはウルムを病院に連れて行く。

「うん・・・。」

あれから何匹かのモンスターと出くわし、その度にウルムは突っ込んだ。

モンスターは運良く群れていなかったため、ウルムの特攻で蹴散らすことができた。

「俺は忘れないうちに剣を買ってくる。」

「はい、ではこの宿屋に来てくださいね。」

リンネは宿をとった宿屋のメモを渡す。

「ああ。」

フォンは受け取ると、まっすぐ武器屋に向かった。

アヴァナンは貿易の町だ。

港には毎日数多くの物資が送られ、出てゆく。

フォンは武器屋に入る。

「らっしゅい。」

「免許は？」

フォンは武器類剣種所得許可書を提示する。

「うむ、好きなもの持ってきな。」

フォンはすぐに近くにあった一番安い剣をとった。

「これを。」

「おいおい、あんた……店に置いていてなんだが、こんな剣でい

いのか？」

「ああ、かまわない。」

「はぁ・・・1200ジムだよ。」

フォンは袋から通過を取り出して支払う。

そしてすぐに剣を元々もっていた鞘の反対側に装備する。

「まだどーぞ。」

フォンは、すぐに宿へ向かった。

「さすがにまだか。」

フォンは部屋に入るとすぐにベッドに入った。

目を閉ざすと、あらゆる事がマブタの裏にみえる。

たった一夜のあの出来事さえ、何日も経った気がする。

心身共に疲れきっている。

フォンはゆっくりと夢の世界へと誘われた。

「おまえが望むものを与えよう」

「ボクが・・・求めるもの？」

「おまえが望むのはチカラだ」

「チカラ・・・」

「与えよう、チカラを・・・」

「本当に？」

「ただし、お前は我によって失う」

「何を？」

「全てだ、家族、知人、親友、恋人、未来」

「え？」

「おまえの全てを奪う、その代わり、おまえはチカラを得る」

「嫌だ！チカラなんていらない！！」

「もう逃れられない・・・頂くぞ、貴様の全てを」

「嫌だ！返せ！返せ！！！！」

「返せ！！！！！！」

フォンは天井に向かって手を伸ばす。

「あ……すすすまねえ兄貴！！返すよ！返すよ！兄貴のプリン！」

ウルムが慌ててプリンを机に置く。

「フォンさん……そんなにプリンが好きなんですか？」

「は？……あ、いやそうじゃなくて。」

見れば、すでに日は落ち、リンネとウルムは夕食中だった。

「いいんじゃないですか？」

男の人でも、その、プリン好きでも……。」

「いや、別にプリン好きでは……。」　　＜フォンは「プリン好き」の称号を得た！＞

（翌日）

「市場」

「さすがにすごいですね。」

リンネは朝市の人の多さに呆氣にとられる。人々が活気にあふれている。

「ガンデスへはこの先の荒野を抜ける必要がある。といっても、四時間も歩けば着くんだがな。」

フォンは品定めのために市場を歩く。

しばらくして、必要最低限の食料を調達する。

「おいおい！そのヒト！！」

その陽気な声に3人は声がした方向に視線をむけた。そこには明らかに陽気そうな青年が居た。

「そのアンタさ、ずいぶん安っぽい剣持ってるな！見せてくれよ」

修行の身で金は取らないさ！

失敗したら弁償すつけどな！」

笑いながらウォンカは云う。

「んじやな！縁があつたらまた合おうや！」

ウォンカはハンマーを背中に戻すと、早々に歩いていった。

「俺達も行こう。」

「そうですね。」

リンネは小袋を持ち上げる。

三人は荒野へと向かった。

陽気な鍛冶師見習い（後書き）

ウォンカのハンマーはゲートボールで使うハンマーみたいな感じですよ。

ゲートボールのハンマーがわからない人はゴルフのクラブのヘッドが左右についている感じの物を想像してください。

無感覚の少女

「水の国ガンデス・国境街アクエリア」

ここは国の7割が水で覆われている国ガンデス。

国内を大きくわけて8分割にするヒューレン川が存在する。

「キレイな街だなあ・・・。」

ウルムが目をキラキラさせて言う。

「ガンデスは川がいくつも存在する、移動が楽な国だ。

この街には俺の知人が居る、不本意だが世話になろう。」

フォン達は町へ入っていく。

「おい小娘！ふざけんじゃねえぞ？」

街の中央にある噴水広場でなにやら揉め事があるようだ。

「・・・行こう。」

「ご・・・ん・・・なあ・・・い・・・。」

「・・・。」

フォンは無視しようとしたが聞き覚えのある声がしたので振り向いた。

「あ・・・。」

ゴロツキに囲まれている少女とフォンの目が会う。

「シーラ・・・。」

「おうおうおう！アンチャン！この小娘の知り合いか？」

「そうだが・・・。」

「え？フォンさんこの子知ってるんですか！？」

「ああ・・・。」

フォンはリンネの方を向いて答える。

そしてすぐにゴロツキに目を合わせる。

「そうかそうか・・・じゃあアンタに落とし前つけてもらおうか・・・。」

「この子が何をした？」

味方してくれるとわかったのか、シーラはゴロツキの中心から全力疾走でフォンの脚に抱きつくように回りこむ。

「その小娘がぶつかっておいで謝りもせずには走っていきやがったんだよ!!」

「・・・。」

それで？何をすればいい？」

「そおゝだな・・・黙って俺らに殴られる!!」

「そうか、じゃあ好きにしろ。」

フォンは荷物をシーラに渡してゴロツキに歩み寄る。

「ぬ・・・。」

「どうした？」

「へ・・・覚悟しろよ!!」

ゴロツキはフォンの顔面にパンチを入れた。

鈍い音が響く。

「な・・・!!」

「どうした？」

「うわあああ!!!!」

ゴロツキは手を握って転げる。

「て！てめえ！何した!!!!？」

「何も。」

「く・・・くそ!!!!」

ゴロツキはフォンを取り囲む。

そして、各々刃物や鈍器を握る。

「か、覚悟しろ・・・!!」

「何事だ？」

「マスター!!!!??」

ゴロツキ経ちの包囲網はとかれた。

「おまえ達、ここで何をしていた？その凶器はなんだ？」

「へ？あ、ああ・・・な、何でしょうね・・・えへへへへ。」

「わかるようにしてやるのか？」

「ムー。」

「^{イエス}御意、^{マイロード}御主人様。」

男の隣に立っている水色のショートヘアの少女は右手にソードブレイカー、左手にダガーを持つ。

そして、一步ゴロツキに歩み寄る。

「す、すみませんでしたああああ！！！！」

ゴロツキ達は我先にと逃げ出した。

「ムー、追いかけて後で私のところに連れてきてくれ。」

「御意に。」

ムーと呼ばれた15歳くらいの少女はゴロツキ達を追いかけて行った。

「さて。」

男はフォンに目を向けた。

「さつきはすまなかつたね、騎士長どの。」

「俺はいい、この娘が何かされていなければいいが。」

フォンはシーラに目をやる。

シーラは首を横に振る。

「大丈夫みたいですね。」

リンネがそれを見て微笑む。

「いや・・・病院へ連れて行こう。」

「え？」

「それなら私のところの医者に当たらせよう。」

「頼む。」

話がまったく見えないまま、リンネとウルムはフォンについて行った。

「ギルドホスピタル」

「腕にヒビが入っていますね。そうとう強く打ち付けられたようだ。」

「医者はシーラの腕をそつとヒザの上に置く。」

「まあ三日もすれば直りますよ。」

「ちよつと（相当）苦いこの薬を飲めばね。」

「ウインクしながら医者はフォンにビンを渡す。」

「すまなかつたね。」

男は頭を下げる。

「謝るならこの子に謝ってくれ。」

「それもそうだ。」

「あ、あの・・・。」

リンネがたまらず声を上げる。

「ん？」

「話がまったく見えないのですけど・・・。」

「ああ・・・そうだな。」

「これは申し訳ない。」

「ここでは何なのでどうぞ客間の方へ。」

男は客間へと通してくれた。

「ギルドゲストルーム」

フォンはソファに二人を座らせると、まず男を指した。

「彼はルーキアス・レネイ、俺の古い戦友だ。」

そして、このガーディアンギルド・フォービスのギルドマスターだ。

「

「ルーキアス・レネイです。」

先ほどは部下が無礼を働いてしまつて申し訳ない。

このギルドは志願兵と共に、どうしようもないヤツラも保護する意味で雇っているんです。」

「リンネです。よろしくおねがいします。」

「オイラはウルム。」

フォンは次にシーラを自分の前に立たせた。

「この子はシーラ、リーデニスの妹だ。

この子は神経系の病気で、刺激を感じないうえにうまくしゃべれない。」

シーラは丁寧にお辞儀する。

「・・・。」

「どうした？」

リンネはシーラを見つめて黙り込んだ。

「ところで。」

フォンはルーキアスと目を合わせる。

「シーラはギルドに預けたはずだが。」

「ああ、すまない。

彼らは新入りだね。

このギルドの名目は街の守護だ。

自分達が偉いと勘違いするバカがいてね。」

「マスター。」

突然、扉が開かれ、グルグル巻きにされたゴロツキ達が部屋の中に放り込まれた。

「ちょうどいいところに来た。

紹介しよう、彼女はムー。私の護衛だ。」

「・・・。」

お初にお目にかかります。ムーと申します。」

ムーは丁寧に頭を下げた。

「ムー、彼らは右からリンネさん、ウルムさんだ。」

「ど、どうも・・・。」

「よろしくおねがいしますね。」

「はい、光栄であります。」

ところでマスター、彼らはどういたしますか？」

ムーは縛られたゴロツキ、もといギルド員を指す。

「んっ・・・じゃあお仕置き部屋に入れといて。」

「御意。」

ムーは軽々とギルド員達を担ぐと、部屋から出て行った。
「さて。」

ルーキアスはフォン達を平等に見る。

「何か大変な事がおきているらしいね。」

すでに王都の件は私の耳に入っている。

ま、とりあえずはゆっくい休んでくれてかまわないよ。

夕食になったら呼びにこさせるよ。」

ルーキアスは扉へ歩いていった。

「すまない、世話になる。」

「気にしないでくれてというのが基本かな？」

微笑みながらルーキアスはゆっくり扉を閉めた。

無感覚の少女（後書き）

たくさんの方々（推定80名）が読んでくださっています
非常にうれしいです！ありがとうございます！！

炎のギルドマスター

「こいつは景気の良い話じゃないな・・・。」

ルーキアスは煙草を吸いながら資料に目を通す。

「はい、いかがしますか？マスター。」

ムーは机の前で綺麗に立ってルーキアスの返答を待つ。

「とりあえず、フォン達には気づかれないように・・・これはこの街の問題だ。」

異国の客人を巻き込むわけにはいかない。」

ルーキアスは紙束を机に置いた。

「とりあえず、今日明日どうこうという話じゃないからな。」

あせることはない、各員の鍛錬を強化するか。」

ルーキアスは煙草を灰皿に置く。

「どうした？ムー。」

「マスター、お願いがあります。」

「なにかな？」

ムーは、滅多にお願いなど言わない。

珍しいことにルーキアスは興味しんしんである。

「実は、フォン殿とお手合わせ願いたく思います。」

「ほお。」

「ヴァリクラの英雄と言われるそのチカラ、この身で感じたく思います。」

失礼ながら、私はあの方が一国の英雄と言われるほどの人物に見えません。」

「あはははは！」

それは傑作だ！

まあ本人も嫌とは云わないだろうね。

ちょうどいい、ギルド員達の闘志も上がるだろう。

じゃあ話をつけてくるよ。」

ルーキアスは煙草の火を消し、部屋を出た。

「あゝ、ここは気持ちいいなあ……。」「

ウルムはベッドに寝転がる。

「この国は気候はいいからな。」「

フォンは剣の整備をする。

リンネとシーラは女同士で何かをしている。

花札というらしい。

異国のゲームなうえにルールが難しいのでフォンとウルムはパスした。

「居心地はどうか？」「

扉に背をあずけてルーキアスが立っている。

「かなり良い感じた。」「

「それはよかった。

では、フォン殿には少し働いてもらおうかな？」「

「ん？」「

ウルムとリンネはルーキアスを見る。

シーラはフォンの方を見た。

「実は、明日の午後、ギルド員総出で演習をするんだが、ムーとフォンに前座……。というと言葉が悪いが、一騎打ちをしてもらいたい。武器は木刀だがね。」「

「かまわないが……。あの子はいいのか？」「

「ああ、彼女から言い出したことだからね。」「

「兄貴、何か気にさわることしたのか？」「

「した覚えはないがな。」「

フォンは剣を鞘に収めた。

〵翌日・午後〵

天気は快晴。

清々しい風が吹く。

「・・・。」

ムーはフォンの前に立つ。

総勢40名のギルド員全員がフォンとムーに注目している。

ギルド員の一人がフォンとムーに木製の武器を渡す。

ムーは武器を構えるとフォンをにらみつける。

静かな空間が周りの緊張感を強調する。

フォンは木製の武器を受け取ると、それを地面に捨てた。

「・・・どういふつもりですか？」

「いや、木刀とはいえ、女の子に剣を向けるのは気が引けるんでな。」

「な！・・・手加減は無用です！

こちらにも本気でいきます。」

「もちろん本気でいく。でないと君が怪我をする。」

ムーのポルテージが急上昇する。

「覚悟・・・！！！！！！」

ムーは地面を蹴り、二本の木製の小刀を構えて突っ込む。

足が速いらしく、10mの距離は一瞬で縮まる。

「てやあっ！！」

左手のナイフが天へ向かって振り上げられた。

瞬時に右手のナイフで突きを繰り出す。

それは一瞬の出来事だ。

しかし、フォンはソレを見切り、ほとんど動かずに避けた。

「ちっ。」

一回転しながらしゃがみこみつっ、水平に斬る。

そして、立ち上がりざまに身体のパネを利用して切り上げる。

そのとき、ムーは距離が間合いの外であることに気づく。

慌てて前へ出る。

それがスキとなった。

フォンはムーの左腕をつかむと、一捻りで彼女を反転させ後ろを取った。

そのまま左手の小刀を滑らせるように奪うと、首元にあてた。

「終わりだ。」

「くっ……。」

ギルド員達は呆気にとられている。

ほんの数秒で自分達のアイドルともいえるギルド内最強（マスター省）のムーが素手の男に負けたからだ。

フォンはムーの拘束を解く。

「君は剣筋もスピードも申し分ないが、一つ一つの行動が単調だ。もう少し、技に流れをもつといい。」

「……ありがとうございました。」

ムーは頭を下げる。

同じようにフォンも頭を下げた。

「すばらしい！」

ルーキアスはパチパチ手叩きながら二人を賞賛した。

「す・すげえ……兄貴すげえ！」

ウルムも感動の声をあらわにする。

一気に歓声が沸いた。

しかし、それを割るよう一人の男がなだれ込んでくる。

「た、たいへんだあ！」

やつらが予定より早くきやがった……！

「……！」

ルーキアスは男に歩み寄る。

「どこだ？」

「き、北と南と海から……！」

「ちっ。」

ルーキアスは考え込む。

「各員、装備を整えて海と北に向かえ……！」

「どうした？」

「……。」

「マスター。」

ムーがルーキアスの側に立つ。

「我々だけでは間に合いません。」

「しかたないか……。」

ルーキアスはフォンとリンネとウルムとシーラを平等に見る。

「すまないが手を貸してくれ。」

「わかった。」

俺は北を、こいつらは南に。」

「頼む。」

フォンは3人を引き連れてゲストルームに急いだ。

「どうしたんですか？」

リンネは走りながら問う。

「この街は時々モンスターの襲撃を受けるんだ。」

あの慌てようからして、時期が早まったんだろう。」

フォンは必要最低限の薬を確認する。

「北は比較的ザコいモンスターが集中している。」

俺が一人で北へ向かう。おまえ達は南の迎撃に加わってくれ。」

「了解!!」

「わかりました!」

「シーラは……。」

フォンはシーラを見る。

その目は自分も加勢すると言っている。

「……俺と一緒に!」

「アクエリア・南最終防衛地域」

「みなさんこつちへ!!」

ムーが二人を誘導する。

「すでに他の方たちがあらかた削ってくれています。私たちはここでヤツラにトドメをさします。」

「はい!」

ムーは草原の方を見る。

「来ます!!」

3匹のタカのようなモンスターが飛び掛ってくる。

ムーはモンスターの一撃を避け、翼に切りつけた。

ウルムは突っ込んでくるモンスターの額に矢を打ち込み、絶命させる。

リンネは治癒魔法で援護した。

しばらく奮闘が続いた。

何十分かした後、モンスターの勢いは弱くなっていく。

「あと少しです!!」

その時、ムーの背後に巨大なクモのモンスターが現れた。

「きゃああ!!」

重い一撃でムーは吹き飛ばされる。

「くそ! 朱零弓!!」

赤い閃光を放つ矢はまっすぐにモンスターに飛ぶ。

しかし、モンスターの皮膚はその矢を弾いた。

その瞬間、矢は爆発する。

「どうだ!!?」

ウルムは腕を上げた。

モンスターのポルテージが上昇する。

「な! 無傷!!?」

モンスターには傷ひとつついていない。

クモ型のモンスターは糸をムーとウルムに吐きかける。

ウルムは糸に絡まり、身動きが取れなくなる。

ムーはなんとか逃げようとしたが、糸が足と地面をつないでしまった。

「くそっ！」

ダガーで斬ろうとするが切れない。

「ムーさん！！」

モンスターはムーに近づく。

そこへ強力な水流がモンスターにぶつかる。

リンネはその水流の放たれた方向を見る。

「シーラちゃん！？」

シーラの魔法でモンスターは怯む。

しかし、すぐに体制を整えてムーを一飲みにしようとする。

巨大でグロテスクな口が開かれた。

「！！！！！！」

ムーは目を見開いた。

その口の奥は漆黒の世界だった。

「ムーさん！！！！！！」

リンネが叫ぶよりも早く、モンスターの前に男が立ちはだかった。

「ふっ。」

ルーキアスは不適に笑うと、片腕をモンスターの頭に当てた。

ルーキアスの手の甲に紅い紋章が浮かぶ。

「燃え上がれ。」

云々と同時にモンスターの全身は炎に包まれた。

一瞬、炎が強くなった。

その後、炎は現れた時と同じように1秒もかからずに消えた。

モンスターの身体は完全に炭化し、そよ風に吹き飛ばされた。

「大丈夫かな？」

「マスター……。」

ルーキアスはムーの足に絡まりついている糸を燃やした。

その直後、別の巨大なモンスターが飛び掛ってくる。

「マスター！！！！」

「大丈夫、私たちには彼が居る。」

鉄がこすれる音が響く。

クマのようなモンスターの一撃を、フォンは片腕で持った剣で止めた。

「頼むからイチャつくのは終わってからにしてくれ。」

「心外だな、可愛い部下を身をていして守っているんだよ?」

「はぁ・・・。」

フォンはモンスターをなぎ払う

「刃斬激!」

モンスターが空中を舞っている間に強力な斬派で真つ二つに斬った。

「これで全部か?」

「ああ、ご苦労様。」

フォンは剣を鞘に収めた。

「じゃあ帰ろうか。」

ルーキアスが帰路に着く。

「その前に。」

「ん?」

フォンはルーキアス呼び止めた。

リンネがその後ろで苦笑しながらウルムを指差す。

「ん~~~~ん~~~~!!!」

ウルムは糸と格闘していた。

「ああ!ごめんごめん。」

ルーキアスは笑って謝りながらウルムに歩み寄った。

炎のギルドマスター（後書き）

この小説はケータイからのアクセスが多いようです。

私はPCで文を書いているので携帯との画面の差が激しく思います。

だからといって文体を携帯で見やすいように書く技術は、私にはありません><

携帯で読んで下さっている皆様、非常に申し訳ないです><

白と紅、そして・・・（前編）

「アクエリア運河港」

「それではお元気で。」

ムーが港まで見送りに着てくれた。

ルーキアスは昨日の仕事の後片付けだそうだ。

「世話になった。あいつによろしく云っておいてくれ。」

「はい。」

その笑顔は無垢な少女そのものだった。

こんな華奢な身体と天使級の笑顔が、戦場の近くで戦っているなど想像できない。

「それではまた。」

リンネは負けないくらいの笑顔で答える。

ウルムはすでに見慣れない船に乗り込んでいる。

汽笛の音が出発を告げる。

船はゆつくりと目的地へ進んだ。

「ギルドマスタールーム」

「はぁ・・・フォンの奴・・・北でそうとう暴れてくれたな・・・。」

ルーキアスは頭を抱えながら報告書を書く。

「なんで遺体を残すかな・・・。」

「マスター、それは無茶です。」

ムーが港から一直線に戻ってくる。

「マスターは炎で燃やせますが、彼らには無理ですよ。」

ムーが呆れながら云っていると、突然背後の扉が勢いよくあけられた。

「マスター！大変です！！捜索中だった凶悪殺人犯が先ほど出発し

たシュリクリム号に!!」

「シュリクリム号・・・フォン殿達が乗っていった船です!」

ルーキアスは静かに報告書を見つめる。

それは北から攻めてきたモンスターの詳細だ。

モンスターの数は32.

北から攻めてくるには多すぎる数。

しかも、逃げ出したものも居るであろうから、実際は40以上だろう。

「マスター!至急船に潜入部隊を!

たとえフォン殿といえどアイツラからの不意打ちではケガではすみません!!」

ルーキアスはペンを滑らせる。

「ムー、この世界にはな、悪魔が居るんだよ。」

「は?」

「悪魔は人にチカラを与えるんだ。」

「チカラ・・・ですか?」

「そう、チカラだ。」

俺は火の悪魔に出会った。

あいつは・・・。」

「シュリクリム号」

「んー、心地いいですね。」

リンネは背伸びをしながらいった。

シーラは隣で河を覗き込んでいる。

あの後、出発の前夜にシーラは着いていくと言い出したのだ。

フォンは猛反対したが、リンネとルーキアスの後押しもあり、フォンは折れたのだ。

運河は静かで、景色の中にはモンスターが走り回っている。

襲ってこそすれば凶悪なモンスターだが、その全てが人を襲うわけでない。

澄んだ空気が流れるように吹く。

「停泊は明後日だ、ゆつくりするといい。」

「やったあ！」

ウルムは飛び上がって喜んだ。

「ん？その声は・・・。」

向こうから男が一人歩み寄ってくる。

「おっほ！やっぱりな！」

「よ！久しぶり！！」

その青年は片腕を上げて歩み寄ってくる。

「ウォンカ・・・さん？でしたっけ？」

「おお！覚えててくれたか！ありがたいね！！」

ウォンカは大げさに言う。

「ところでそっちのアンチャンさ！」

この剣どうだったよ！？

「ああ、使い勝手が良かった。ありがとう。」

「そいつはよかった！」

「アンタら旅してるのか？」

「ああ。」

フォンは即答で答えた。

相変わらずテンションが低いフォンに対してウォンカはハイテンションで喋る。

「んじゃあさ！俺もその旅に混ぜてくれよ！」

「え？」

リンネは想定外の言葉に驚く。

「俺も宛てのない旅をしてるんだよ！」

「旅は道ずれっていうだろ？」

「兄貴、いいのか？」

「……。」

フォンはウォンカを見る。

「何難しい顔してるんだよー！」

ウォンカはフォンの肩を叩く。

「……俺の名はフォン……一応犯罪者だ。」

「ああゝヴァリクラの英雄だろ？ んで？」

「んでって……だから……！」

「んなのは関係ねえよ！！」

もし警備隊に捕まったら「脅されました！」って云うからよー！」

ウォンカは笑いながら云う。

「よろしくな！」

「私はリンネです。」

「ウルムだ！」

「おう！ よろしくな！！ そっちの可愛い嬢ちゃんは？」

フォンがシーラの背中を軽く押す。

「この子はシーラ、うまく声がだせないんだ。」

「そっか、よろしくな！！」

ウォンカはしゃがみこむと頭を荒くなでた。

シーラは脳に近い部位の感覚はあるらしい。

船の上に太陽が昇ってきた。

静寂で満たされていた甲板に魔法で出現した炎が舞い上がる。

「ん？」

ウォンカはその炎の直下を見る。

その炎に焼かれた女性が倒れこんでいた。

隣で子供が泣いている。

ウォンカは慌てて駆け寄る。

「おい！ 大丈夫か！！？」

「リンネ！」

「はい！」

リンネは素早く瞬間治癒魔法を使う。

フォンは周りを見渡す。

運河をはさんでいる陸地は平らな草原。

「船の外から攻撃されたわけじゃないようだ・・・」

ウルム！リンネの側で護衛を頼む。」

「あいさ！」

「ウォンカ、俺達は船の中を搜索だ！」

「あいよ！」

フォンとウォンカは二手に分かれて船内に入ってしまった。

「ヴァリクラ・王城・大臣室」

「シルヴァか・・・。」

リーエーは部屋に入ってきたシルヴァを見た。

「ケリシリスが裏切ったようだ。」

牢獄の剣は抜けない、あそこはしばらく使えないな。」

フォンの剣が刺さっている以上、魔法陣は発動しないのだ。

「まったく、うつとしい剣を持っているもんだな、あの剣がなければあの晩、陛下の前で奴の醜態をさらせるところだったのにな・・・。」

リーエーは上質なイスに腰を下ろした。

「元騎士長を殺せ。」

リーエーは窓際に立っている黒い皮のロングコートを着た男に命令する。

男の腰には二本の細く長い剣が納まっている。

「リュオが追いかけただろう？」

「ああ・・・。」

男はシルヴァに確認をとる。

「なら問題はない。時間はかかるがな。」

男は窓の外を眺めている。

「早急に・・・お願いしたいんだがな・・・？」

「今からでは俺も追いつけないさ。」

「ふん、アルケミスタとは役立たずの集団か？」

シルヴァは愚痴をもらす。

その言葉が終わると同時にシルヴァの喉元に剣が向けられていた。

一瞬で黒いコートの男は3メートル強の距離を移動したのだ。

差し出された剣を持つ手の甲には青白い紋章が浮かんでいる。

「ぐっ。」

「そのアルケミスタを利用しているのはお前達能無しだろ？」

男はゆっくりと剣を鞘に収めた。

そして再び窓の外を眺めた。

白と紅、そして・・・（前編）（後書き）

次回が話のキモです。

白と紅、そして・・・（後編）（前書き）

今回はR15ギリギリです（多分）。

想像のしかたによつてはすごいエゲツないです。

苦手な方は今回はパスするか、あんまり深く考えずに読んで下さい。
エゲツないのは最後のほうなんで半分上は大丈夫です^^；

白と紅、そして・・・（後編）

「シユリクリム号」

ウォンカは船内を走り回る。

「くっそ、どこだ？」

同刻、フォンは船内の主に下層部の部屋をしらみつぶしに歩いていた。

時々、ウォンカとフォンはすれ違う。

「どうしてアイツは同じ場所をグルグル走ってるんだ？」

フォンは呆れながら階段を下りていく。

このシユリクリム号は国宝級の豪華客船だ。

ルーキアスの配慮がなければ庶民が乗ることはできない。

しかし、今回はそれがアダとなった。

巨大な船内に加え、争いごととは無縁の上流階級のボンボンが乗り合わせている。

もし、人質にでもとられたら救助は困難だ。

救出時にカスリ傷でも負わせてしまえば、一体いくらの医療費を払わせられることやら・・・。

「甲板」

リンネは女性の治療に集中していた。

未熟な瞬間治癒魔法も、時間がたつにつれその効果を発揮していく。

女性の流血は完全に止まっている。

「マアマア」。

隣で少年が泣いている。

「う・・・クリス・・・」

女性は我が子を開かない目を無理やり開けて見る。

「動かないでください。私のチカラじゃ、まだまだ動かないほうが

賢明です。」

リンネは両手を重ねて傷口の少し上に手を添えている。その隣でウルムとシーラが誰か居ないか確認している。

「船内」

ウォンカはエンジンルームに飛び込んだ。

「立ち入り禁止」の張り紙を無視して。

「へっ、みつけた。」

ウォンカはエンジンに細工をしている明らかに怪しい人物をたまたま発見する。

「うわ！見つかった、なんでわかったの？」

「船に潜入した敵役はエンジンに近づくってのがお約束なんだよ！」

「えゝそうかな？」

ま、なんでもいいや、兄貴達に怒られそうだから、おまえ殺す。」

明るいい口調で青年は剣を取った。

「ほお、おもしれえ……」

鍛冶師に剣向けるとはいい度胸だ。」

ウォンカはハンマーを構える。

「あれ？君鍛冶師なの？」

いいの？鍛冶師がハンマーを武器にしちゃって？

鍛冶師にとってハンマーって神聖な物でしょ？」

「ほお、よく知ってるな。」

でもな、物なんて使えるときに使えるヤツを使ってナンボなんだよ

！」

ウォンカはハンマーを振り上げた。

「……」

フォンは船長室をノックする。

「てやあああああ！！！！」

ウォンカはハンマーで青年をおもいつき吹き飛ばす。
「っ！」

青年は剣の腹でそれを受け止めてしまっている。
チカラを受け流すこともできずに、青年はエンジンルームの天井を貫く。

そして、甲板に出て、そのまま空高く舞い上がる。
ウォンカは所々の階を足場にして甲板に出た。
青年は手すりに着地した。

「やるね、ニイチャン・・・。」

「おまえはまだまだだな。」

「おまえじゃない！ギルだ！」

「ほおギルってのか。」

ウォンカは声は陽気だが、顔は笑っていない。
後ろでリンネが女性を治癒魔法で回復させている。
それを見たギルは不敵な笑みを浮かべる。

「ふふふ。」

「あ？」

「もうすぐショータイムだよ。」

「そうか、じゃあその前に叩き潰す！！！」

ウォンカは床を蹴って前へ出る。

そして、ギルごと船の外側で落ちる。

二人は河を越えて陸地に落ちる。

「ウォンカの兄貴！」

ウルムが手すりに走って二人の所在を確認する。

二人は草原で戦っていた。

金属のぶつかる音が響く。

それから数分と経たないうちにギルの剣は折れた。

「え？」

ウォンカはそのままギルの横っ腹にハンマーの打撃を直撃させる。

「ぐあつ・・・！！！！！！」

ギルは転がっていく。

「くっそ・・・！」

ギルは苦しそうに立ち上がる。

「さあ、ココから先は俺主催のフェスティバルだ！！」

ウォンカは2つのハンマーをブンブン回す。

「押しつぶされる！！秘奥義！木端微塵！！！！」

ウォンカがハンマーを逆八の字に構えた瞬間、上空から圧縮された空気の弾が一気に落ちてきた。

「ああああああつあああああああ！！！！」

その空気の弾はギルの身体に降り注ぐ。

否、厳密にはウォンカの周囲に落ちているのだ。

数秒間、空気の弾は降り注ぎ続けた。

空気の弾の雨が全て落ちると、そこには無数のクレーターができていた。

「俺の勝ちだな！」

ウォンカはハンマーを収めた。

シユリクリム号の船長室の窓ガラスが割れる。

その破片は甲板に音をたてて落ちた。

そこから男が二人落ちてくる、それを追うようにフォンが落ちてくる。

オレオンに抱かれた少年は腕を突き出した。そこから雷撃がはしる。

フォンはそれを剣でなぎ払った。

「なかなかやるようだね。」

オレオンは笑いながら甲板に着地する。

「あ、ギル。」

少年は倒れているギルを見る。

「そうか、君の仲間か？」

フォンも甲板に着地する。

「そのようだ。」

オレオンはフォンに変わらぬ笑みを見せる。

「あゝ！くっそ！フォンの方が数多いじゃねえか！！負けた！！」
ウォンカは草原から叫ぶ。

「君の仲間はお気楽だね。」

「・・・同感だ。」

フォンはオレオンの皮肉に賛同する。

「さあ、シヨータイムだ。シオ。」

「うん、兄様。」

シオは治療中の女性に腕をかざした。

「クリムゾン・ブレット。」

「あああああああああああああ！！！！」

女性は急に悲鳴を上げた。

リンネは驚いて後ろに転びそうになる。それをシーラが支えた。

「ママ！？ママ！！？」

少年は母親の手をとる。

「あああつ・・・うあつ・・・あ？・・・。」

痛みが急に引いたかのように、女性は悲鳴を止めた。

「ママ？」

少年は泣きながら母親の手を強く握った。

「・・・ああ・・・クリス・・・。」

母親も我が子の手を握った。

その瞬間、二人は爆発した。

轟音と人の焼けた臭いが広がる。

リンネは目を見開き、言葉をなくした。

それはシーラも同じだった。

「ふはははは！！どうだ？すばらしいだろう？

あれは連鎖魔法さ。

クリムゾン・ブレードは触れている全ての命を燃やすのさ！」

「！！！！・・・貴様あ！！！！」

フォンはオレオンに向き直る。

「おい！なんだ今の爆発音！？」

ウォンカが船の甲板に戻ってくる。

「！！！！」

そして、リンネの前に残っているコゲ跡を見る。

「てめえええ！！！！！！！！！！」

瞬時にその意味を理解し、ハンマーでオレオンに殴りかかる。

しかし、オレオンは軽々とそれを避け、ギルの所へ飛び降りた。

「ギル立てるか？」

「あ、兄貴・・・ごめん。」

「気にするな・・・ではまた会おう！諸君！！！！」

オレオンは船に背を向けた。

フォンが甲板を駆ける。

そして、手すりに半分もたれかかり、右腕をオレオン達に向けた。

その手の甲には黄緑色の紋章が浮かんでいる。

『消え失せる！！！！』

その言葉と同時に黒い球体が出現し、一瞬で大きくなってオレオン達を包み込んだ。

そして、また同じように小さくなっていき、消滅した。

そこにはウォンカが作ったものとは違う、巨大なクレーターがあるだけだった。

しばらく静かな時間が流れた。

そして、ウォンカが口を開く。

「おまえ・・・今の、なんだ？」

ウォンカが目を丸くして聞く。

ウルムも同じように目を丸くしている。

「さあな・・・ただ、ルーキアスは悪魔のチカラと呼んでいる。」

実際に悪魔か天使かは知らないがな・・・。」

そういうと、フォンはゆっくりと船室へ戻っていく。

「もう、二度と使わない・・・こんなモノ・・・。」

「あ・・・。」

リンネはその場から動けずに居た。

そして、震えながら自分の手を見た。

「救えなかった・・・私じゃあ・・・救えなかった・・・？」

白い手にはポツポツと涙が落ちる。

「救えたはずなのに・・・救えた、はずなのに・・・!!」

リンネは小さくうずくまった。

「救えたはずなのに・・・また、救えなかった・・・私は・・・どうして・・・。」

シーラはリンネを見守る事しかできなかった。

白と紅、そして・・・（後編）（後書き）

瞬間治癒魔法

瞬間的に傷口の細胞の再生能力を上昇させる魔法。

今回は超ダークな内容です。R15ギリギリです。

多分・・・^^；

感想評価をいただけると励みになるのでよろしくお願いします^^ノ

最後に一言、今回のこの話は自身最高だと思ってます！

アルヴァニカ大聖堂

「シルファ」

ここはアクエリアとミレルの中間に位置する町。

ここは世界三大宗教であるアルヴァニカ教の発源地である。

シュリクリム号はここで補給をし、そのままミレルに向かう予定だった。

しかし、国際指名手配犯オレオンの襲撃により、シュリクリム号の運行は停止。

しかたなく、フォン達は2日後に出るミレル行きの通常船に乗ることにした。

「おお！綺麗な街だなあ！！」

ウォンカが大げさに叫ぶ。

「すっげえ！おっきい家がいっぱいだ！！」

ウルムも演技っぽく大声で棒読みする。

そして、二人は後ろを見る。

そこには明らかにテンションの低い男女が黙々と歩いている。

「くねえよ……」

ウォンカは静かに突っ込む。

「兄貴」。

「ああ……」

まったく心のない返事が帰ってくる。

「ああ！フォン！あの術使いたくねえなら使わなきゃいいだろが！

！！

リンネちゃんも！！未熟で救えなかったと後悔するなら、次に誰で

も助けられるように努力するのが王道だろ！！？」

「ウォンカさん……」

暗い声でリンネはウォンカを見る。

側でシーラもうなずく。

「シーラちゃん・・・そう・・・ですね。」

リンネは手のひらを見る。

「落ち込んでいる場合じゃあないですよね・・・。」

「おうよ！！人は日々進むんだぜ！！」

「・・・はい！」

リンネは今日始めて前を向いた。

「おい！おまえはいつまでそうしてるんだよ！？」

フォンは相変わらず上の空で歩いている。

「ああ・・・。」

難しい顔で返事をする。

「リンネちゃんも立ち直ったんだぞ！？」

男のお前がクヨクヨしててどーすんだよ！？」

「・・・。」

ずっと考えていたんだが・・・。」

「ん？」

全員がフォンを見る。

「明らかに不可解な点がある・・・。」

「な、なんだよ。」

皆興味津々で、次のフォンの言葉を待つ。

「昨日と今日・・・明らかに金額分の食事じゃなかったよな？」

「はあ！！！！？」

心の底から声が出た。

何を考えているかと思えば、食事のことで悩んでいたとは、誰も思わなかった。

そもそも料金はルーキアス持ちなので彼らはタダ飯になる。

「おまえ・・・もしかしてボケキヤラ？」

「は？」

「おかしいだろ！？」

前回あんな終わり方してて冒頭の発言が飯の質のどうこうって・・・

「！！？」

「しかし・・・一人23000ジムも取っておきながら昼食なしで、出てきたのが鶏のスープに・・・。」

「ああ！はいはいわかりました！！

早く宿行こうぜ！！」

ウォンカはズガズガ歩き出した。

「アイツは何を怒っているんだ？」

「さ・さあ・・・。」

リンネは苦笑で答えた。

「俺は怒ってねえ！！」

遠くからウォンカの叫びが聞こえた。

ふと、目の前を質素な服の男が通る。

フォンは一步下がった。

「兄貴？」

ウルムがフォンを見上げる。

「・・・いや、なんでもない。」

「んあゝ！！いい湯だったなあ！」

ウォンカがタオルで頭を拭きながら部屋に戻ってくる。

フォンがウォンカに見えるようにウォンカのベッドにお金を置いた。

「明日は丸一日自由行動だ。」

「おお！小遣いか！

この街は骨董品で有名だぜ！？」

「できるだけ旅の荷物にならないものを買えよ？」

「わーってるって！」

ウォンカはベッドに飛び乗る。

「それから、リンネ。」

「はい？」

「ちよつと来てくれ。」

「？」

フォンはリンネを別室に呼んだ。

「なんだ？」

「さあ・・・？」

ウオンカとウルムは顔を見合わせた。

（翌日）

「アルヴァニカ大聖堂」

「うわぁ・・・。」

「・・・！」

リンネとシーラはアルヴァニカ大聖堂のステンドグラスを眺めていた。

アルヴァニカ教の協会はアルヴァニカを信仰するものしか立ち入れないが、ここアルヴァニカ大聖堂だけは、たとえ異教徒でも入室することが可能なのだ。

黄色と青を貴重としたステンドグラスは、高さ12メートルにも及ぶ超巨大硝子細工だ。

これは常に水と関わりを持つガンデス独特の技法で作られている。

ひとしきり大聖堂を見学すると、二人は早々に外へ出る。

「綺麗でしたね。」

リンネはいつもの笑顔でシーラに話しかけた。

シーラも満面の笑みでうなづく。

そこへ一人の男が近寄ってくる。

「むゝ……。」

ウォンカは硝子細工とにらみ合っていた。

「ウォンカの兄貴ゝ、買うのか買わないのかハッキリしてくれよ。」

「

「いやぁ……。買わないけどさ……。どうやったらこうなるか……。不思議じゃね？」

「おまえは鍛冶師だろ？」

硝子職人じゃない。買わないなら行くぞ。」

フォンは呆れた物言いをする。

そこへ、シーラが走ってくる。

それも全力で。

「どうした？」

フォンはしゃがみこむ。

シーラは少し息を整えると、紙切れを渡す。

そこにはシーラの字で文章が書かれていた。

「……。」

「兄貴？」

ウルムは紙切れを覗き込んだ。

「な！！姉御が誘拐！！？」

「何！

リンネちゃん、誰をさらったのか！！？」

「は？違う違う！！姉御が誘拐されたんだよ！！」

「なにに！！一大事じゃねえか！！！」

ウォンカとウルムは慌てる。

しかし、フォンは冷静に何かを考えていた。

「アルケミスタが動いたか……。それともアルヴァニカ？

いや、あの服装はどっちでもないか……。ここですらうつということは、少なくともフォードングリフか……。？」

「兄貴！！」

「ん？」

フォンは振り返った。

すでに二人は臨戦態勢だ。

「早く行くぜ！！」

「慌てるな、フォーデングリフだとすれば、場所の目星はついてる。殺されもしないから安心しろ。」

万全の体制で乗り込む。」

「なんでそんなことがいえんだよ！！？」

「職業柄・・・ハカリゴトは得意だな。」

フォンはゆっくりと歩き出した。

「ん~~~~~！！！」

リンネは口と手足を縛られ、薄汚い小屋に押し込まれた。外から声が聞こえる。

リンネは扉までなんとか移動し、話し声を聞き取る。

「あの娘・・・アルヴァニカじゃねえぞ！」

「クソ！大聖堂から出てきたからてつきり・・・。」

もう一人のガキのほうだったか・・・？」

「どっちにしても、生かしておくのは危険だ。顔を見られた！」

「くっそ！ドルコニスからわざわざ来たってのに！」

（ドルコニス？・・・それって確かフォーデングリフ教の聖地・・・。）

扉が勢いよく開かれた。

男が刃物を持っている。

「聞いてたのか・・・。」

リンネは男をにらみつける。

「悪く思っなよ・・・。」

男は細剣の切っ先をリンネに向けた。

「大いなる神フォーデングリフの名の下に・・・罪深き者に至福の

時を・・・」

刃が輝き、深々とリンネの右肺を貫いた。

紅い血がこぼれる。

そのまま左肺を引き裂く。

胸に紅い血の横棒が引かれる。

リンネはそのまま冷たい地面に倒れこんだ。

灰色の地面に紅い池ができた。

男はそれを見届けると、小屋の外へ出た。

アルヴァニカ大聖堂（後書き）

サブ・キャラクター紹介

名前：ルーキアス・レネイ 25才 男

ガーディアンギルドのギルドマスター。

紅いショートヘアーの男がアクエリアを歩けば誰もが尊敬の眼差しを向ける。

元々ガンデスの軍人で、19歳の初陣のときフォンと出会う。

16歳の時、宗教戦争によって両親を失い、誰よりも孤独の辛さを知っている。

実は甘党。

名前：ムー 18歳 女

いつもルーキアスの隣に居る少女。

実年齢より幼く見られることに悩んでいる。

対人戦においてはほぼ無敵、フォンに負けた時以外は全戦全勝。

幼いころ、孤児でアクエリアの裏町で瀕死のところをルーキアスに拾われ、レネイ家でルーキアスと兄妹同然に育てられた。

しかし、ムーはルーキアスの事を兄妹としてではなく異性として意識している。（純粹なんですよ^^）

9年前の宗教戦争をきっかけに、彼女は変わっていった。
毎朝毎晩牛乳をかかさない。

フォーデングリフ教

風が吹く。

石で囲まれた街を抜けた風は、まるで命を持ったかのように、まるで、言葉を学んだかのように語りかけてくる。

「む……。」

両目を閉じて座っている男は、風が語りかけてくる方向に向いた。

「なにやら……よからぬことが起こるそうだな……。」

男はゆっくりと立ち上がった。

そこへ、誰かが走り抜けていく。

臭いや足音からして、女の子のようだ。

走り抜けていく時、風が男に吹く。

「そうか……大丈夫だな。」

男は再びそこへ座り込んだ。

「宿屋」

「用意はできてるか？」

フォンが3人に振り向く。

「早く行くぜ！！」

「んで？どこなんだよ？」

「こつちだ。」

フォンは3人を裏道へ案内していく。

そこは大聖堂の裏、そこからさらに町の外へ出る。

「あそこだ。」

防風林の中に小さな小屋が見える。

その周りを数人の男が見張っている。

「ほお……。」

「んで？どうするんだ？」

フォンは剣を抜いた。

「真正面から殴りかかる。」

「防風林」

「あゝ・・・次誰の番だっけ？」

「おまえ。」

「うつそ!？」

男が二人、防風林の獣道を進む。

「俺死体の処理って苦手なんだよねえ。」

「いいじゃねえか、俺の時は爺さんだぜ？」

おまえは若い女じゃねえか。」

「そうだよなあ。」

あゝ殺るまえに―――」

「そこから先は禁句だ。」

「は・・・あ？」

男は地にひれ伏す。

フォンは鞘で男の後頭部を殴ったのだ。

「な!なんだてめえ!」

「お姫様を救い出す王子様一行だ!」

別の茂みからフォン力が飛び出す。

そして、地面と平行になるようにハンマーで男のミゾオチに叩き込んだ。

「ごおっほあ!」

男は倒れた。

フォン力は男を見下す。

「なあ、こいつらさっき死体の処理がどーのこーの云ってなかったか？」

「・・・急ごう!」

「防風林の小屋前」

ウルムが遠距離から門番に矢を撃ち込んだ。
先端が石のタイプなので気絶させただけだ。

「おっし！」

「いぜ兄貴達！！」

フォンとウオンカが小屋に近づく。

中から男達が出てくる。

「な！なああああああ！？」

セリフを言い切る前に、シーラの魔法で3人の男は防風林の外まで押し流された。

4人は小屋に飛び込む。

「姉御！……うつ……。」

「な！なに……。！？」

「……。」

そこにはリンネの冷たい亡骸が横たわっていた。

「……。てめえ！」

何が命は大丈夫だ！？ああ！！？」

ウオンカはフォンの胸倉をつかんだ。

「ウオンカの兄貴！」

ウルムが静止に入るが自分よりはるかに大きい男を止めることはできない。

「無駄だ……。誰もコレを止めることはできなかったんだ。

相手がフォーデングリフ教だったからな……。」

「んなの関係ねえだろが！！」

もつと早く来てりゃあ救えたかもしれねえだろが！

全部わかった口きいてんじえねえ！！」

「ウオンカさん！やめてください！」

「黙っててくれリンネちゃん！！」

ウォンカは小さくなる。

いつも明るい男が急に小さくなると、あまりにも見栄えが悪い。

「リンネ、いつまで隠れているつもりだ？」

「フフフ、ごめんなさい。面白くてツイ。」

紙を破る音がする。

そして、ゆっくりとリンネの身体が現れてくる。

しかしこの少女、かなり腹黒い。

現れたのはウォンカの背後だ。

「ウォンカさん。」

リンネは困惑状態のウォンカに話しかける。

「ナムアミダブツ……。」

静かにそう云うと、ウォンカは白目になって倒れた。

〈数十分後〉

「っで……どういうことだ？」

ウォンカは座り込んでムスっとしている。

リンネが隣で機嫌をとっている。

フォンは破かれた2枚のカードを見せる。

「これはリーデニスがかなり前に持たせてくれた高等魔法陣の描かれたカードだ。」

こっちは持ち主に似た人形を創るカード。こっちは透明になるカードだ。」

「すげえ……。」

ウルムは関心する。

「んなモンいつ渡したんだ？」

納得がいかないと云わんばかりにウォンカは問う。

「昨日の夜。」

「あゝ、そういえば二人で話してたな……ってこたあおまえ……」

・誘拐起こるのしってたな？」

「知っていたというよりは、こうなるように仕向けた。」

「はあ？」

「昨日の街でフォーデングリフ教の紋章をつけた男が歩いてたんだ。もし、何かしでかすなら、一般人に被害が出ないようと思ってリンネに一芝居うつてもらった。」

「そういうわけです。」

リンネは笑顔をウォンカに向ける。

「なるほどね・・・でもよぉ・・・そういうことなら先に云ってくれよ！」

「こんなこたあ金輪際二度とゴメンだ！」

「安心してくれ、代理人形の魔法陣と透明の魔法陣は今ので最後だ。」

「

「でも、うれしかったですよ？」

「？」

「ウォンカさん、私のためにあんなに怒ってくれて。」

「お、おう！当たり前だろ！！仲間だかな！！」

ウォンカはいつもの明るい陽気な口調に戻る。

ウォンカのテンションは完全に回復した。

リンネは3人に向かってウィンクする。

まったく侮れない少女だ。

「よし！んじゃあ帰るか！！」

ウォンカは立ち上がった。

「それはそうなんだが・・・。」

フォンは辺りを見渡す。

「どうしたんですか？」

ウルムが問う。

「いや、フォーデングリフ教がリンネをさらった理由を確かめて、元を叩かなければな、意味がない。」

「確かにな。」

ウォンカは奥にある祭壇に近寄る。

「ちよつと待ったあああああ！！！！！！！！」
遠くから声が響いてくる。

「なんだ！？」

ウォンカはハンマーを構える。

「その祭壇にちかづくなああああ！！！！」
見れば少女が走って突っ込んでくる。

「んだあ！？新手か！！！？」

ウォンカはハンマーで突きにかかった。

おそらくその一撃が華奢な少女の腹部にはいれば、少女は気絶するだろう。

しかし、少女は跳ぶと、ハンマーの頭を踏み台にさらにジャンプ。
一回転しながらウォンカの頭上を越えた。

そして、そのままの勢いで祭壇に走る。

半分のしかかるようにぶつかりながら、祭壇の上にあつた長細い陶器をつかむ。

すると、それをあらゆる角度から眺める。

しばらくして、少女はガツクリと肩を落とす。結構大げさに。

「あげる。」

暗い低テンションの声で言うと、少女は陶器を放り投げた。
フォンは陶器を受け取る。

そのまま超低テンションのまま小屋を出る。

「て、てめえら・・・。」

すると、刃物をもった男が現れた。それは獣道でウォンカが殴った男だ。

男は刃物を振りかざす。

「しねえ！！」

「うつさい！！ケチケチしやがって！こんのボケエ！！！！」
少女は回し蹴りを男の頬にかます。

「げふうあ！！！！」

男は自分の身長と同じくらい吹き飛ばされた。

「ふん！」

そのまま少女は茂みに消えた。

「な、なんだったんだ？今の・・・。」

ウォンカは呆然と立ち尽くす。

フォンは陶器を見る。

「なるほど・・・コレが原因だったようだ。」

フォンは陶器を全員が見えるように差し出す。

「この陶器にアルヴァニカ信者の血を流すことによって、異教の民は救われる・・・フォーデングリフ教らしい考え方だ。」

「どういうことだよ？」

「詳しいことは帰って話す。」

この件はアルヴァニカ大聖堂の導師に報告して・・・。」

フォンは陶器を叩きつける。

「これで解決だ。」

フォン達は帰路につく。

フォーデングリフ教（後書き）

キャラクター紹介

名前：ウォンカ・シュートレン 22歳 男

一流の鍛冶師を目指す陽気な青年。

以外に物事を冷静に見えるほう。

父親が鍛冶師をつがなかったため、彼は父親を憎んでいる。

しかし、別に鍛冶師以外に生き方があったわけではない。

彼は自身の師である祖父を尊敬しており、いつか祖父のような鍛冶師になれるようにと日々精進している。

かなりの怖がり。あと、高所恐怖症。

世界三大宗教

「アルヴァニカ大聖堂」

「ふむ・・・わかり申した・・・。」

アルヴァニカ教導師エクトールはフォンに軽く頭を下げた。

「信じていただけて感謝する。」

これが証拠の品だ。異教の品をそのまま持ち込むのは無礼とおもつてな、先に砕かせてもらった。」

「それはそれは、しかし、心配には及ばぬ。」

物は所詮物、それに与える意味は人それぞれ。」

「なるほど、それには同感だ！」

ウオンカが後ろから叫ぶように云う。

「では。」

フォンは振り返り、大聖堂を後にした。

「宿」

「予定どおり、明日出発だ。」

フォンは荷物をまとめ始める。

「ところでさ兄貴。」

「ん？」

「そのフォーデングリフ教ってどんあ宗教なんだ？
どくも気になるんっすよね。」

「おゝ俺も俺も。」

ウルムとウオンカは騒がしく云う。

シーラも首を縦に振る。

「少し長いぞ？」

「オツケーー！！」

リンネちゃん！茶どこだっけ？」

「これです。」

リンネは入れたての茶をテーブルにおいた。

「おお！さすがリンネちゃん！準備がいい！！」

ウォンカとウルムはイスに飛びつくように座る。

シーラは行儀よくイスに腰を下ろす。

床に足がつかないのでブラブラさせている。

フォンは荷物を置くと、ベッドに座った。

「・・・フォーデングリフ教。

死こそが幸福であると説く宗教だ。

しかし、誰もが死ねば平等に幸福になるわけではない。

生きている間にどれだけの苦痛・試練を味わったかによって、死後の幸福の度合いが変わる。

死後の幸福のために今ある辛さを我慢せよ。

それがフォーデングリフ教だ。

その対になるのが、アルヴァニカ教。

生きているこそが幸福であると説く宗教。

しかし、幸福への代償として神は各個人にそれぞれ試練を与える。

その試練を耐え抜いたからこそ幸福が訪れる。

最も現実的な宗教だ。

そして、世界三大宗教の中で最も信仰があるのがイシシノス教だ。

これは最高神イシシノスの加護をもって人間は魂を得ると説く宗教だ。

生まれた全ての人間には生まれた意味が存在する。

だから人間はその意味を理解し、己に与えられた氏指名を果たす、

さすれば、神は褒美として幸福を与える。

イシシノス教が何故一番信仰されているかといえば・・・おそらく

この宗教には神が存在するからだな。」

フォンは話し終わると4人を見た。

シーラは話の内容がよく理解できなかった様子だ。

意外にも、ウォンカは理解したようだ。

「なるほどなあ・・・なんか、どれも聞こえはいいな。」

「そんなものさ、宗教なんてな。」

しかし、だからと云って宗教を邪険にはできない、それに救いを求める人がいる限りな・・・。」

フォンは立ち上がるとテーブルの茶を飲んだ。

ほんのりと口の中に香りが漂う。

「・・・。」

「どうしたんですか？」

「いや、なんでもない。」

フォンは荷物の整理を始めた。

「なあ、よくよく考えたらさ、アルヴァニカとイシシノスって似てないか？」

「そうだよなあ・・・つかさ、アルヴァニカとフォーデングリフの方が似てるきがするんすけど？」

「なんでだよ？」

生きる幸福と死ぬ幸福だぞ？」

「でもさ、どっちも生きている間に辛いことを我慢しようっていつてるぜ？」

フォンは二人の会話に無意識に気配で入り込む。

「おまえなんでかしてるのか？」

ウォンカはフォンに問いかけた。

「・・・。」

振り返ると全員が興味ありげな眼差しで見ている。

「ふう・・・お前達、長生きできないタイプだな。」

フォンが振り返りながら立ち上がる。

「どうことだよ!？」

「・・・少しだけ。」

「?」

「少しだけ危ない世界のお話だ。」

いいか？他言無用だ。」

フォンはテーブルに歩み寄ってイスに座る。

「この世界には2つの秘密結社が存在する。

その秘密結社は世界の繁栄を導くために存在する。

しかしだ。そもそもそんな組織が2つ、共同戦線をはれるはずがない。

両者は対立関係にある。

その両者の対立が表に出た結果、宗教が生まれた。

最初はアルヴァニカとフォーデングリフの2つ共、片方の組織の駒だった。

しかし、もう片方が反発してイシシノス教を設立、アルヴァニカ教をも支配下に置いた。」

フォンは真剣に話す。だが・・・。

「ぷ！」

あはははは！おいおい！フォン！それどこの童話だよ？」

ウオンカを含め、全員が半信半疑のようだ。

「兄貴！冗談がすぎるぜ！」

「証拠を上げようか？」

フォンのその一言で場が再び凍結する。

「過去の宗教戦争において、死者が出たのはどことこの戦争だ？」
全員黙り込む。

彼らの脳裏に映し出される文字はくフォーデングリフvsイシシノス>だけだからだ。

「はは、たまたまだろ？」

そもそもおまえ、どこでそんな情報手に入れたんだよ？」

「そういう所からヘッドハンティングされかけてな・・・。

親友のおかげで助かった。」

フォンは再び荷物整理に戻った。

「その親友というのは誰ですか？」

リンネはフォンの背中に話しかけた。

フォンは少し考えたような間合いをとって口を開いた。

「死んだと思っていた・・・いや、死んだ親友だ。」

「死んだ・・・親友？」

「おいおいおい！俺をビビらすのがそんなに楽しいか？」

「そういうつもりじゃない・・・ただ。」

「ただ？なんだ？」

「・・・俺が殺したんだ。そいつを。」

世界三大宗教（後書き）

フォンの脳内パーティ賢さ順位

フォン<リンネ<ウルム<シーラ<ウォンカ

さあ皆様はどの宗教が好き？アルヴァニカ？フォーデングリフ？
イシシノス？

まあどれも似たようなものですけどね^^；

ボイズンミスト

「はい、これが今回の台本ね。」

女の子が青年に一束の書類を手渡した。

「・・・ちよつと待て。」

「ん？ボクが作った脚本に何か文句でもあるの？」

「冒頭でこんなセリフ云わないといけないのか!？」

「あつたりまえじゃ〜ん」

女の子は手を突き出して親指をたてた。

「〜」。-

青年は頭を抱えた。

「アルヴァニカ大聖堂前」

「ここで薬を買ったら出発だ。」

フォンは薬屋の前で振りかえつて云った。

「船が出んのは夕方だろ？それまで自由行動でよくないか？」

ウォンカが手をヒラヒラさせながら云う。

「心配だ。」

「何がですか？」

別に迷子になるようなことはないと思いますよ?」

リンネが一步前に入る。

「そうじゃない。」

待つても災難がきそうなものを・・・別行動をとったらよけい展開が嫌な方向に向きそうだ・・・。」

「確かに・・・。」

ウルムが賛成する。

「ここ最近、事件ばかりでしたからねえ〜。」

フォンはそのまま店へ入っていった。

その時、町中が紫色の霧に覆われていく。

「フォンさん！」

リンネの叫び声にフォンは慌てて振り返る。

目の前で人々が倒れていく。

「うつ・・・気分悪い・・・。」

ウオンカが手で口を覆う。

「ちっ。」

フォンは腰のカードケースから一枚のカードを取り出した。

それを地面に叩きつけると魔法陣が形成された。

「ここに入れ！」

魔法陣の中には霧が入ってこない。

「ここまで大掛かりだと、準備にそうとう時間かかってるだろうなあ・・・。」

ウルムが魔法陣の前を漂う霧を見ながら云った。

その一言にフォンはハツとする。

「そうか・・・フォーデングリフはこれを隠すためのカモフラージュか・・・。」

フォンは可能なかぎりあたりを見渡す。

所々の隅に魔法陣が見える。

「してやられたな・・・。」

「あの。」

「ん？」

「これ、どういう魔法陣ですか？」

「すまない、そこまではわからない。」

ウオンカが会話に割ってはいる。

「これ多分酸化魔法だな。」

「酸化魔法？」

「ああ、鍛冶師なら最初に覚える下級魔法だ。別名ポイズンミストって言うんだがな。」

鍛冶師はこの魔法をリサイクルの時に使ったよ。」

「リサイクル？」

「ああ、一旦剣とかに使われてる鉄を酸化させるんだ。

そしたら朽ちる。それで剣に宿されてた魔法が消えるんだ。

魔法がかつたまま他のと混ぜると何が起きるかわからないからな。」

フォンは聞き終えると町の人に視線を向ける。

「その酸化魔法で人が倒れたりするの？」

「云つたろ？別名ポイズンミストだって。

死にはしないけど、結構長い間失神状態になるな。」

ウォンカはハンマーを構える。

フォンとウルムも武器を構えた。

いっどこから敵が襲ってくるかわからない。

シーラもいつでも詠唱できる構えをとる。

リンネは一人であさつての方向を見ていた。

しばらくして勝手にポイズンミストが引いていく。

アルヴァニカ大聖堂の屋根の上に人影がちらつく。

「誰だ！？」

ウォンカは叫んだ。

「我が名は疾速の雷神ルーベン。

我が天命により、汝らに裁きを与えるものなり。」

「……………」

「……………」

「……………」

場が凍りついた。

ウォンカは呆れたように口火をきつた。

「あんた……それ云つてて恥ずかしくないのか？」

「……………」

軍師殿の脚本になければ言わないさ……！」

「軍師？」

ウルムが弓を下ろしながら聞く。

あの一言で全員の殺気は消えたのだ。

「はい！そんなわけでミフレコンデスの軍師！シャーリーちゃん登場！！」

屋根の上で小さな女の子が飛び出してくる。

「うわ！」

女の子は屋根から滑り落ちそうになる。

すかさずルーベンは彼女を支えた。

「おんな・・・のこ？」

「ひど！」

これでも18歳だよー！！」

シャーリーはスツと体制を立て直す。

「ええ！オイラより年上！！？」

ウルムは素直に驚く。

外見はどっからどう見ても10歳前後だからだ。

シーラと同じ年にしか見えない。

「それで？一体何が目的だ？」

フォンは冷静に質問する。

シャーリーはキョロキョロあたりを見渡す。

「ん・・・なんていうかですね。」

その少年Aをさらいに来たのですよ。」

シャーリーはウルムを指差した。

「！！！！」

「は？なんで？」

まあ理由なんざどーでもいいか。

仲間かどわかそうってんならボッコボコにしてやらあ！」

ウォンカは再びハンマーを構えた。

「あそのハンマー君が戦うみたいだよ？」

「そのようだ、俺に勝てるつもりでいるとはな・・・。」

ルーベンは細剣を構え、その切っ先をウォンカに向ける。
「へーロリータ引き連れてる変体なんざに負けるか!!」

「カッチーーン！」

幼女^{ロリータ}ってボクのこと!?

許せない!!ルー君やつちやえ!!

あ、でも殺しちゃだめだよ？」

「（幼女性愛好家^{ロリコン}か・・・否定できそうにないな・・・）行くぞ
!!」

ルーベンが一步步み出る。

「かかってこいよ!!」

こっちには必殺の切り札があるんだ!!」

「切り札？」

ルーベンは踏みとどまる。

「なんせこのフォンはなんでも消しちまうんだからな！」

「馬鹿よせ!!」

「ほお・・・。」

フォンは慌ててウォンカをとめようとしたが遅かった。

「おまえもフィールド・オブを持つ者か・・・。」

「・・・だつたらなんだ？」

「消す・・・削除・・・フィールド・オブ・デリートか？」

「勝手に思ってる。」

「そう隔靴するな。」

俺はフェアでないと気に食わないのでな、俺も教えてやる。」

ルーベンは右腕の甲を見せた。

そこに黄色い紋章が浮かぶ。

「俺のチカラは雷撃だ!」疾走しろ!!」

叫ぶと同時に雷撃が繰り出される。

通常の雷撃魔法は何度も折れ曲がって目標にたどり着く、しかし、
コレは一直線に対象へ向かって飛んでくる。

「おまえの使用条件は満たされているか?使わなければ死ぬぞ。」

「ふん。」

まっすぐ飛んでくる黄色い閃光を、フォンは剣で雷撃を退けた。

「あいにく、電撃の扱いは慣れていてね。」

「・・・。」

なるほど。」

ルーベンが屋根から飛び降りる。

そしてフォンに斬りかかる。

フォンはそれを受け流した。

そしてしばらく奮闘が続く。

数分の間、静かな町には剣の擦れ合う音が響いた。

そして、その高い金属音を、少女の声がかき消す。

「おいルー君！台本読んだ？」

もうお帰りの時間だよ？」

ルーベンは十分フォンから間合いを開くと、ポケットから何回も折った紙を取り出す。

「・・・捕獲失敗・・・って、おまえ最初から成功する気ゼロだよ。」

「えへへへへ、ごめんごめん。」

シャーリーは笑顔で謝る。

「じゃあな。」

「まいったね~~~~」

2人はそのまま消えていった。

「・・・。」

フォンはウォンカに歩み寄る。

「馬鹿が！」「ぐうあー！！」

ウォンカの頭上にゲンコツが振り落とされた。

「フィールド・オブはチカラがわかると対処できるんだ！

むやみやたらに敵に教えるな！！」

「そおなのか！？」

「当たり前だ！！」

万物に勝利するチカラなんかあるわけないだろ！！」

そこへリンネが歩み寄る。

「ちなみにその対処方法ってなんですか？」

「俺のとルーキアスのは教えるとその馬鹿がまた口走りそうだから云わないが・・・いや、ルーキアスはいいか・・・」

とりあえずさっきのルーベンってやつが使ったのはおそらくフィールド・オブ・ライトニング

絶縁物以外の全てに電気を走らせるチカラだ。

物は全て電気の通しやすさが異なる。

電気を通しやすい金属を振りかざせばあいつのチカラは無効化できるんだ・・・。」

「それで、ルーキアスさんののは？」

「あれか・・・アイツのは発火物以外には火をつけられないってことさえ知ってればいい。」

水とか鉄とかはあいつでは燃やせない。」

「へっ・・・なるほどなるほど。」

リンネはわざとっぽくうなずく。

「？」

それはウルムへの気遣いだった。

リンネは2人の意識がウルムに向かないようにしている。

ウルムは地面を見つめたまま立ち尽くしていた。

シーラが心配そうに隣で立っている。

「・・・くそ。」

ウルムは弓を握り締めた。

ポイズンミスト（後書き）

最近やっと気がついたのですが、どうも私は描写を箇条書きにするクセがあるようですね。

ちよこちよこ修正して行こうと思います。

隠されている真実（前書き）

今回から第二章の幕開けです。

隠されている真実

「客船ローマンレール号・客室」

「ゴホッゴホッ！」

「忘れていた・・・。」

フォンは頭を抱えて立ち尽くしている。

「云えよ先に。」

「すまない。」

ウォンカは呆れた口調でフォンに言った。

フォンは素直に自分のミス（？）を謝った。

ここ数日、忙しい極まりない出来事が立て続けに起こったのでフォンはもちろん、リンネ自身も忘れていた。

「コホッコホッ！」

風邪気味だということを・・・。

リンネは以前、迷いの森よろしくラーホネットの森でフォンに風邪気味だと言っていた。

彼女は医者を目指した時期があり、風邪への対処法は知っていた、ゆえに、いままで発症しなかったわけだが、国を超えるに当たってその環境の変化が彼女の体の耐性を衰えさせたため、発症にいたった。

（本人談）

リンネは客室の白いベッドに横になっている。

シーラが心配そうにその隣で座っている。

その一角だけを見ればまるで病室だ。

「ミレルに降りたら一旦病院へ行くか。」

フォンは地図を取り出して病院を探す。

「あの、大丈夫ですよ。」

「ダメダメリンネちゃん！！風邪は万病の元だぜ？」

「そうだよ姉御！病人はゆっくりしてればいいって！」

「いえ、本当に大丈夫です。」

「一日眠れば直りますから。」

リンネは上半身を起こしながら答える。

いつもは明るい少女が急に弱弱しくなると、健気に見えてきてしまう。

これがギャップというやつだろう。

「本人の意見を尊重するか。」

フォンは広げていた地図に印をつける。

「なんだよ？風邪を甘く見たらダメだぞ？」

うちのばあちゃんなんか風邪で吐いたぞ？」

「知るか。」

何より……。」

フォンは財布を広げて見せた。

そこから一枚の硬貨が回転しながら落ちていく。

「……うわ。」

ウルムが哀れみの声を上げた。

「さむ……。」

ウォンカが両手を交差させて両肩をつかむ。

ここガンデスは比較的暖かい国だ。

しかし、この一行の財政はヴァリクラ並に寒かった。

「つと云うわけだ。」

この宿が一番安い。」

広げた地図に赤い丸が描かれていた。

「ミレル」

フォン達はリンネを宿に寝かしつけてケリシリスのメル友もとい文通仲間の<アドランス>を訪ね歩いていた。

シーラはリンネに付き添っている。

「んでさ、そのケリシリスっておっさんの文通相手ってやつばおっさんか？」

ウォンカはリンゴをかじりながら歩いていた。

「知るか。」

フォンは軽く受け流す。

ミレルはそれほど大きい街ではない。

むしろ、田舎と言ってもいい。

地面は石で敷き詰められており、一見すれば白と黄色が目立つ町並みだ。

河から内陸へは一直線に進むことができる細長い町なのだ。

フォン達は道行く人に尋ね、ある大きな貴族の家の前に来ていた。

「アドランス・・・ここか。」

フォンは表札を確認する。

ウルムがベルを鳴らす。

「はい。」

程なくして一人の男性が出てきた。

「あなた方は？」

「我々はケリシリス殿の紹介でここにきました。」

フォンは少し表情を崩して云った。

「・・・アルケミスタか？」

「あるけみすた？」

ウォンカが聞きなおす。

「・・・違うのか？」

「アルケミスタとは別件です。」

フォンが断言する。

ウォンカとウルムは意味がわかっていない。

それがわかったのか、男性は門を開けてくれた。

「話の中で伺います。」

「アドランス邸」

「すつげえ……。」

ウルムは始めてみる豪邸に目を奪われる。

一応豪華客船には乗ったが、それとはまた違ったゴージャス感が出ている。

「それで？用件とは？」

男性はティーカップをテーブルにおいて早々に話を持ちかけてきた。彼の名はジーカ・アドランスというそうだ。

いかにも医者といった雰囲気のある男である。

温厚そうな彼は鼻の下で左右に均等に伸ばしたヒゲをさすっている。

「二つ……。」

フォンは静かに話し始めた。

「ひとつは、ケリシリス殿の訃報をお知らせに……。」

「な！」

男性は一瞬驚いたように目を見開いた。

しかし、すぐに元に戻る。

フォンはあることを確信した。

「それで？もうひとつは？」

「……ケリシリス殿と文通の仲にあった方がいらっしゃるとお聞きしました。」

「……。」

ジーカは黙り込んだ。

ウオンカは出されて早々飲み干したティーカップをテーブルに戻す。

「居ない。」

「は？」

ウオンカが無意識に声を出した。

「娘はもう、家には居ない……！」

「娘さんが、ケリシリス殿と文通を？」

「そうだ、娘は医者を目指していた。」

ガンデスとヴァリクラの友好条約記念式典で彼にそのことを告げると、彼は笑顔で娘に手紙を書いた。

しかし、娘はもうここには居ないのだ。」

「居ないって・・・どうということだよ？」

ウオンカはさらに聞く。

フォンは黙ってジーカの顔を見つめている。

「死んだ。」

その言葉にウルムとウオンカは言葉を失う。

触れてはいけない場所というものが心には存在する。

男は悲しそうにティーカップの水面を眺めている。

「・・・失礼しました。」

フォンは立ち上がると、さつさと部屋を出た。

ウオンカとウルムも軽く頭を下げた部屋を出る。

「アドランス低前」

「・・・。」

フォンは早足で宿に向かう。

「おいフォン！待てって！！」

ウオンカとウルムが走って追いつく。

「何を急いでるんっすか？」

ウルムは早足で進むフォンの真横につくように速度を調整している。

「あの男はケリシリスの名しか知らない。」

「はい？」

ウルムは素っ頓狂な声を出した。

フォンは立ち止まり、二人に向き直る。

「あの男は何かを隠している。」

「何かって何だよ？」

「わからない、何を隠しているのか・・・思い当たるフシが多すぎる。

どれかひとつか、それとも全てか・・・。
とりあえず宿に戻るぞ。

ここで調べることは山ほどある・・・！」

隠されている真実（後書き）

キャラクター紹介

名前：シーラ・リユール 13歳

身体の8割の感覚を失っている少女。

幼くして宗教戦争により親を亡くし、1週間姉妹で路頭をさまよったことがある。

実家はリンゴ農園で、それなりに彼女もリンゴにうるさい口。
リーダー

姉の見よう真似で、半分は遊びで魔法を習得したが、

小回りの聞く下級魔法や万用性のある中級魔法を扱えない。しかし、素質はあるため、彼女が習得している5つの上級魔法はどれも強力である。

進むべき道と帰すべき場所

「宿屋」

「んゝ．．．！！」

リンネは背伸びをする。

しばらく寝たきりだったので肩がこっているようだ。

「ただいまー。」

ウオンカは勢いよく扉を開いた。

「ん？リンネちゃん、もう大丈夫なのか？」

「はい！」

いつもの笑顔でリンネは答えた。

輝かしい笑顔と長い金色の髪がよく似合う。

「それで、アドランス邸には行き着きましたか？」

「それがさあ。」

ウオンカは頭をかきむしるしぐさをする。

「なんかケリシリスっておっさんの文通相手とかいう娘さん？」

「が、もう死んでるらしくってさあ。」

「おっさんって．．．あの方まだ28歳ですよ？」

リンネは苦笑する。

「．．．そうなのか？」

フォンは素直な質問をした。

「はい。」

自信満々にリンネは笑顔になる。

「よく知っているな。」

「ええまあ。」

フォンはリンネの笑顔を見て少し安心した。

いつもどおり、表情からは何も読み取れない謎100%の笑顔だ。

まあそれはそれで問題な気がしなくもない。

「それじゃあ行きましようか？」

「え？どこに？」

ウルムは目を丸くする。

「アドランス邸へ」

まったくもって表情からは何も読み取れない。

「アドランス邸前」

「んでさ、ついさっき来たばかりなんですけど……どのツラして入ればいい？」

ウオンカはオロオロ門の奥を見る。

門は来た時と同じ、固く閉ざされている。

リンネは門の隣の植木に手を突っ込んだ。

「姉御？」

「ん？」

しばらくして、リンネは自慢気にカギをウルムに見せた。

「何それ？」

「この扉のカギですよ？」

リンネはまるでそれが普通だと言わんばかりに門を開いた。

「い、いいのかよ？勝手入って……。」

「あたりまえじゃないですか。」

リンネはそのまま屋敷へと入る。

その後を一行がついていく。

「アドランス邸・エントランス」

「誰だ……！？」

ジーカが扉の開く音がして階段を下りてくる。

「忘れ物を取りに帰ってきました。」

リンネはいつもとは違う、冷たい声で言い放った。

フォンはこの声に聞き覚えがある。

そう、今の話し方は初めてリンネに出会ったあのときに聞いた。

「リンネ・・・おまえ、何故ここに・・・？」

「忘れ物取りに来ました・・・と云いました。」

反抗的な声で一直線に部屋へと足を進める。

「ど、どういことだ・・・？」

ウォンカが頭を回している間にも、リンネは二階の一室に入っていた。

「・・・まだ、あつたんですね・・・私の部屋・・・。」

リンネは部屋においてある本棚の中から分厚い一冊の本を取り出した。

「・・・。」

ジーカはリンネが入っていった部屋の扉を見つめている。

「どういこと？」

ウォンカはまだ頭が混乱している。

「ジーカ殿。」

フォンは歩み寄った。

ジーカは静かに視線をフォンに向けた。

「リンネが、あんたの亡くなった娘ですね？」

「・・・。」

ジーカはまた視線を戻す。

すると、リンネが部屋から出てきた。

手に緑の本を持っている。

「ケリシリスさんがここにどんな人が居るって云ったか、覚えてますか？」

リンネは冷たい笑顔で問う。

「・・・医者を目指す軍師。」

手助けになると。」

リンネは階段の上で暖かい笑みを作った。

「ガンデス公国軍元指令官、リンネ・アドランス。
ヴァリクラ王政奪還のため、フォン騎士長様におつかえいたします。」

「ええ!!?」

ウォンカの頭から煙が出る。

「何がどうなつてんだ???」

ウォンカの頭は完全にシュートしていた。

「順を追って説明してもらえると助かるのだが?」

フォンは半分身を乗り出している。

話についていけないウルムとシーラは立ち尽くしている。

「いいですよ。」

私は元々医者を目指していました。でも、お家柄で兵法を学んで、最年少でガンデス公国軍の指揮官、すなわつ軍師になりました。」

「それが、どうして異国のホームレス少女に成り下がった?」

「その・・・私の父にあたる方に追い出されました。」

ジーカは黙り込む。

「・・・。」

フォンも次の言葉が決まらない。

「行きましょうか。」

リンネは階段を下りていく。

そしてジーカの隣を無表情で通り過ぎていく。

「・・・何故、戻ってきた・・・。」

「忘れ物を取りに・・・コレを取りに来ました。」

安心してください、もう二度と戻ってきません。」

「当たり前だ。」

ジーカはそのまま階段を上っていく。

「おい、ちよつとまった!」

ウォンカはジーカを呼び止めた。

「なんで自分の子供を追い出すんだよ!!?」

ジーカは足を止めたが何も語らない。

リンネはウォンカの叫びを無視して屋敷を出た。

「え・・・と。」

ウルムはとりあえずリンネを追いかけた。

シーラもその後を追いかける。

エントランスには3人だけが取り残された。

「何か理由でもあるのか？」

「それを聞いてどうする？」

「忘れたか？娘は死んだんだ。」

「・・・それがアンタの答えか？」

「・・・。」

「おい待てフォン！」

んな答えなんざどーでもいい！！

俺が聞きたいのはどーして娘を追いつくようなことになったかだよ

！？

ウォンカはジーカにつかみかろうとする。

それを、フォンが止めた。

「！？」

「・・・。」

フォンは静かに首を横に振った。

「どうしてだ・・・？」

今までの活気は消えた、小さく冷たい声でウォンカはジーカに問う。

「娘は・・・死んだんだ。」

ジーカはそのまま自室へと戻っていった。

「行こう。」

フォンはウォンカと共に外へ出た。

「アドランス邸前」

「さて！」

暗い顔で出てきた二人に、リンネは笑顔で歩み寄る。

「これで、ヴァリクラを救う最初の一步が踏み出せましたね。」

ウォンカはテンションを上げる話題だと感づいた。

「ほお！国を取り返すねえ・・・じゃあこの一味は一個の軍団だな！」

「そうですね。」

隊長はフォンさんです。」

「ん？あ、ああ。」

リンネはフォンの両手を握る。

「軍団が強くて武器がよくねえとな！」

俺は軍団専属の鍛冶師だ！」

「じゃ、じゃあ俺は狙撃手ってことで！」

「待て待て、勝手に話を進めるな。」

国を相手にするんだぞ？

遊びじゃない。」

「あら？」

リンネはフォンの顔を覗き込む。

「私は元が付きますが、一国の正規の軍師ですよ？」

「俺が遊びで鍛冶師目指してるとでも？」

ウォンカは腰に手をやる。

「お、オイラだって！生きるために弓引いてたんだからな！」

ウルムも強がつて胸を張る。

「シーラちゃんはお姉さんの後任の魔道師ですね。」

シーラ（↑遊び半分で魔法を覚えた）は少しオドオドしながらうなずく。

「・・・。」

「いいですか？フォンさん。」

今のこの戦力はとても有力ですよ？」

「？」

「だって、どんなに強固な軍団も、絆で結ばれた軍団には勝てないんです。」

リンネは両手を広げた。

フォンは無意識に全員と目が合う。

それは、かつて従えたどの軍団よりも頼りになる。

「・・・そうだな。」

フォンは少し表情を崩した。

「では、これからどうする？軍師殿。」

「そーですねえ・・・。」

リンネはクルクル回りながら考える。

「それじゃあ、まずは財政を整えましょう。」

「うわ！現実的すぎ！」

ウォンカは後ろによろける。

「当たり前です！遊びじゃないですから！」

つというわけで、このまま陸路で南下します。」

リンネは先頭に立って歩き出した。

全員、その後ろについていく。

ウォンカとフォンがアドランス邸に振り返る。

「このままにしないとけないよな？」

「・・・ああ。」

一行は荒野へと進んだ。

進むべき道と帰すべき場所（後書き）

キャラクター紹介

名前：リンネ・アドランス 18歳

幼いころ難病にかかり、その治療のために出会った医師にあこがれ、医者を目指すようになった。

しかし、由緒ある公国軍師の家系であったため、その道をあきらめざるをえなくなった。

軍師としての活躍ぶりは他に引けをとらず、その評判は一時、ガンデス中に広まった。

17歳のとき、父親の態度が激変し、家を追い出された。それにいたる経路は現在不明。

賞金首

「アーデラス・ガンデス国境の草原」

フォンは懐かしい風を浴びる。

ここで戦ってからまだ一月たたない内にここへ来ることになるとは。

ここはアーデラスとの最後の戦いとなった場所だ。

死を覚悟した女騎士長を討ち取った、そして、リーデニスと一緒に陣を張った最後の場所だ。

まだ戦いの痕跡は残っている。

不自然に切り取られた草、焼け焦げた草。

「・・・。」

誰もここで自分が戦っていたなど知るよしもない。

「ここでなんかあったのか？」

ウオンカは歩きながら問う。

「ここ、ほんの少し前まで戦場だったんですよ。」

「へえ、おつかねえなあ。」

リンネが答える。

ウオンカは素直な間奏を口にする。

「んでさ姉御、この先になにかあるんだ？」

「ん？この先には旅人が簡単にお金を稼げる施設がある町があるの。」

「

「えらく都合のいい街だな。」

一行は草原を抜け、アーデラスへと入っていった。

「アーデラス・辺境の町コールネシア」

ここアーデラスは別名「龍の国」と呼ばれる。

その理由は、国土の約3割を占める高地に実に数百種のドラゴンが住んでいるからである。

世界各地にもドラゴンがいるが、ここアーデラスのドラゴンはどれも強力で、種族によつては軍馬として飼育されており、竜騎士はこの国特有の部隊である。

国名でもあるアーデラスとは、過去において最強と謳われた伝説の紅龍ベニリウコンの名前である。

竜にはそれぞれ階級がつけられており、弱い順にブルードラゴン、ダークドラゴン、ホーリードラゴン、アースドラゴン、ホワイトドラゴン、ブラックドラゴン、ゴールドドラゴンと決められており、希少種であり最強のレッドドラゴンがその頂点に居る。

レッドドラゴンは単独で行動しており、番が出会う可能性は非常に低いいため、その数が増えすぎることはない。

「コールネシア総合案内所」

「んで？どの依頼にする？」

ウォンカは町の中央にある巨大な総合案内所のクエストボードを見る。

できれば一回の仕事で多額の資金を調達したい。

しかし、そんな虫のいい話はなかなかない。

ウォンカとフォンがクエストボードとにらめっこしていると、隣からスタッフが腕を伸ばす。

そこに新しいクエストが張り出された。

ウォンカは反射的にそれを見る。

「ええ」と・・・一百万・・・十万！！？」

ウォンカは思わず声を上げた、そこへ他の賞金稼ぎバウンティハンターが駆けおおせる。ウォンカはクエストペーパーをひったくる。

「へへ。」

他の賞金稼ぎに勝利の笑みを見せる。

「ちっ。」

賞金稼ぎたちは三々五々に散っていった。

「それ、どんなお仕事ですか？」

リンネはウォンカに歩み寄る。

「ええと……『宝の洞窟探索大作戦！！』」

「宝の洞窟探索大作戦！！」

私と一緒にアーデラス北西の火山洞窟の探索！

報酬は今の私の全財産！！

ただし！強くてカッコよくて頼りになって見つけた宝は全部私に譲
つてくれる男性限定！！

なんじゃこりゃ？」

ウォンカは呆れたようにリンネに紙を手渡した。

リンネは隅々まで書かれた文章を読む。

「あまり内容に関しては書かれていませんね。」

リンネが紙を呼んでいる間、一人の男がクエストボードから紙を取り、受付へ持っていく。

ウォンカは明らかに異様な雰囲気その男を凝視する。

受付を終えた男は武器を取った。

「死ね！！フォン・カマステイン！！！」

男はそのままフォンに突っ込む。

「な！！フォン！！！」

フォンは少しでも視線を男に向ける。

「……」

振りかざされた斧をフォンは自然な動きで受け止める。

「なに！！？」

「仕事の前に武器の手入れをしておくのは当然だ。」

見れば、その斧の刃はボロボロだった。

「おまえ、クエスト帰りか？」

「ちっ！」

男は一步下がった。

「へへ、五百万の賞金首を目の前にしてじっとしてれなくてねえ・・
。」

男は斧を構える。

「へえ・・・じゃあフォンを役所に引き渡したらしばらく遊んで暮らせるな。」

「ウォンカさん!!？」

「はは、冗談冗談。」

ウォンカは笑いながら謝る。

男は遠めに二人の会話を聞いていた。

そこへシーラがフォン達の所へ駆け寄る。

二人の視線がシーラに向いたのを見て、男はニヤリと笑った。

「！」

「ははは!!！」

フォンがソレに気づくよりも先にシーラは男に捕まった。

急に身体が宙に浮いたので、シーラは何がなんだかわからなくなっ
た。

男に首を握られていると気づいたのは、その斧が首元に向かうのを
見た後、息がなくなつた時だった。

「さあフォン・・・こいつが俺に殺られる前にてめえのクビをさし
だしな・・!!！」

「ちっ。」

フォンは手にしていた剣を放す。

シーラが口元をモゴモゴ動かしている。

「・・・・・！」

全員伏せる!!！」

フォンは叫んだ。

他の全員が一瞬わけがわからないといった表情をしたが、シーラを

見た全員がその意味を知ることになった。
その場で気づいてないのはシーラの後方に居る男だけだ。

シーラを取り巻くように雷が発生する。

「へ？」

雷は一瞬シーラの体内に入ると、一気に爆発するように放たれ、チヤージコンデンサが炸裂した。

シーラを直でつかんでいる男はモロにその電撃を受けた。

「うがががががががが！！！！！！！！！！」

男はガクガク痺れながら倒れた。

シーラはトンツと床に着地する。

そして走ってフォンの懐に飛び込む。

「兄貴！言われたもの買ってきました」。

「って？あれ？何してるの？」

ウルムは案内所の全員が伏せている理由がわからなかった。

「・・・一体誰だ？」

俺に賞金をかけたのは・・・。」

フォンは案内所で依頼の手続きをしているリンネを待っている間、ずっと独り言を言っている。

腕の中でシーラが眠っている。

リンネが駆け足で戻ってくる。

「えーっつとですね。」

町の北門で明日の午後に落ち合う予定です。」

「よっし！」

じゃあ今日はゆっくりするかなあ」。

「無理だな。」

「へ？」

フォンの一言にウォンカは背伸びしたまま振り向く。

「金がない。」

「……うそ。」

ウォンカはサイフを確認する。
中はものの見事に空っぽだ。

「……。」

「さっきウルムの最後の金で今日の夕食を買って来てもらったんだ。」

「ええ！！？あれ夕食！！？」

ウルムが声を上げる。

「何かあったか？」

「干し魚……。」

「……。」

「カ、カルシウムたっぷりですね。」

リンネは苦笑した。

「ってことはさあ……。」

ウォンカは頭の中にある最悪の結果を浮かび上がらせた。

「野宿だ。」

フォンはそれを的確に言い当てた。

賞金首（後書き）

ドラゴン階級はこの作品独自のものです。

別に何かの資料とかを参考にしたわけではないのであしからず。

追記：シーラは魔法詠唱を声に出す必要がないため、口を動かすだけで魔法が使えます。

それはちよつと特殊な道具があつてですね、それは今後出てくるので今はスルーしてください。

赤き守り手

「腹へった・・・」

明らかに脱力しきったウォンカの声が門に響く。

石を積み上げて作ったトンネルのような門は薄暗く、ジメジメしていた。

「なあ……まだか？」

「ウォンカはさつさと仕事を終わらせてまともな食事になりたい・
・。っと昨日から騒いでいる。」

そこへ、一人の少女が駆け寄ってくる。

「オッス！みんな元気かな！？」

「あんたが今回の依頼主かあ？」

ウォンカが前にヒュロヒョロと歩み出る。

そして二人の視線が合う。

7
 •
 •
 •
 ○
 8

7
 •
 •
 •
 ○
 8

「あゝゝゝ！！！！！！！！！！」

二人で同時に叫ぶ。

他の4人がとっさに耳をふさいだ。

「おまえ！あの時の泥棒女！！」

「あんた！あん時のヘタレハンマー！！」

お互いが指を指して言い合う。

その少女は以前、リンネがフォーデングリフ教に捕まつた時にサツソウと現れ、そして疾風の如く消えていった少女だった。

年はリンネと同じくらいにみえる。

黒いセミショートの髪を後ろで止めている。

「おい！誰がヘタレハンマーだ！！」

「だって！あたしに一撃も当ててないじゃん！！

大体泥棒女ってなによ！！？

あたし盗んでないじゃん！！！！

あたしはトレジャーハンター！！

いい！！？ト・レ・ジャー・ハ・ン・ター！！！！」

自称トレジャーハンターの少女は腰に手をそえて前かがみになりながら云う。

「・・・それで？

今回は何をすればいい？」

フォンが静かに本題に入った。

少女はウォン力をステップで通り越してフォンに向き直る。

「んとね。

依頼書に書いてたと思うけど、この先の洞窟の最奥部のお宝を一緒

にとりに行つてほしいの！」

少女はお金が入った包みをフォンに渡す。

「これ前金ね」

残りは終わってから渡すから！」

少女は云うだけ言つと先に立つて歩き出した。

「あ！そうそう！」

少女はクルリと一回転して一行に振り向いた。

「あたしの名前はミア、ミア・エシュ・ドール！よろしくね」

北門を抜け、草原を進む。

この草原には数種類の大きささまざまな龍が潜んでいる。

一般的に龍は高地・火山地帯を好むらしいが、こういった草食の龍もいる。

龍と一言にいつてもその容姿・能力は実に様々で、火を吐くものもあれば大地を震え上がらせるものもある。
この草原の龍には毒を吐きかけてくるものがある。

毒気に何度も侵されながらやつとの思いで洞窟の入り口にたどり着いた。

リンネの補助魔法がなければここまでたどり着けなかっただろう。

「はい！！みんな注目！！」

ミアが大きな声で右腕を天にかざした。

「ここで二人ほど待機ね。」

「は？なんでよ？」

「いいからいいから。」

ミアは数本の紙束を持ち出した。

「これで決めるよ。」

<結果>

洞窟探索チーム

ミア・ウォンカ・ウルム

待機チーム

フォン・シーラ・リンネ

「ちえ、ヘタレハンマーと一緒に……。」

「んだとお？」

「役に立つんでしょうね？」

「てんめえ……！」

「ま、まあまあ。」

探索して早々に喧嘩が始まった。

ウルムは必死に爆破寸前の核爆弾を押さえ込む。

洞窟の中は非常に暗かった。

しかし、ある場所を境に溶岩の洞窟へと変貌した。
煮えたぎるマグマは全てを焼き尽くさんと待ち構えている。
細く、もろい溶岩の橋を渡っていく。
ときおりマグマが吹きかかってくる。

その溶岩の橋の終着地点にはあきらかに人が作ったとわかる門、
ま
たは祭壇があった。

「これ・・・確実に人工だよな・・・？」

ウォンカは恐る恐る祭壇に近づいた。

「あつたりまえでしょ？」

ここにお宝があるんだから人がここに来たことがあるにきまつて
るじゃん。」

ミアは馬鹿馬鹿しいと云わんばかりに扉を開いた。

そして、その奥には黄金に輝く金貨の山があった。

所々から真珠のネックレスやダイヤモンドの指輪など、おとぎ話に
出てくるような財宝が見える。

そして、その上にも・・・。

「ZZZZZZZZZZ。」

おとぎ話に出てくるような・・・。

「・・・え？」

ソレが眠っていた。

「あの・・・。」

ウォンカは硬直した。

そこに眠っているのは正真正銘の・・・。

「レッドドラゴン・・・？」

だった。

赤い鱗が金の光に反射して、まるで燃え滾る炎のようだ。

神話やおとぎ話ならこの一匹の龍を奇跡のパワーで倒すのだろう。

しかし、奇跡チックなことができるフォンは外にいるうえに。

「ZZZZZZZZ」

「ZZZZZZZZ」

そこに眠っているのは二匹のレッドドラゴンだった。

それも番だ。

番の龍は非常に危険で、元々IQの高い龍の番を相手にするのは数百の軍団を相手にするのと同じだといわれる。

その最も脅威となるのは完璧なまでの連携だ。

「さあゝて・・・。」

ミアが手ごろな石をつかむ。

「まてまてまて!!!!!!」

おまえ何する気だ!!!?」

「何って? 起こすにきまつてるじゃん。」

「おまえはアホかあ!!!?」

レッドドラゴンなんか相手にしたら死ぬぞ!!!?」

「死なないように、あんたら雇ったんじゃない。あたしの全財産報酬にして。

死んでもいいけどお金分ぐらいは働きなさいよ。」

「ふざけんなあ!!!!」

ミアはビクツと肩を震わせて少し縮んだ。

「あんなの相手にしたら命どころか魂だって喰われちまうよ!!!」

「あ・・・ウオンカの兄貴?」

ウルムがウオンカの袖をひっぱる。

一瞬眼に映ったシアの表情は凍り付いていた。

少し言い過ぎたかな? と思ったが、ウルムの指す方向を見て納得した。

そこには、眼を覚まして口から灼熱を吹きかけようとしているようにしか見ないレッドドラゴンが二匹、こちらにガンを飛ばしている。「ほっほう・・・お目覚め?」

ウォンカは苦笑いしながら声を出す。

「あ……。」

ウルムは完全に硬直している。

巨大な龍はゆっくりとこちらを見つめている。

「んで？ミアさん？」

起こした後はどーすんの？」

「いや……一匹ずつならあたしの作戦がうまくいったんだけど……。」

ミアは頭の中で何回も叫んだ。

（お願い！気づいて！！！）

一匹の龍が上空を見つめた。

（……！！）

その龍は翼を広げると、開いた天井から飛び出した。

「かかった！！」

ミアは腰の片手剣を引き抜いた。

金属の澄んだ音が響く。

「ど、どうということだ！？」

「番の龍は敵が複数いる場合は分担して各個撃破に向かうの！
あたしらはこいつを叩く！！」

ウォンカとウルムはそれぞれの武器を取り出した。

「洞窟入り口」

「はい。」

リンネは入れたてのハーブティーを差し出した。

「ああ、ありがとう。」

こんなところにハーブが生えているんだな。」

フォンは受け取ったハーブティーを口に含む。

ほのかな香りが口いっぱいに広がって鼻へ回ってくる。

シーラもなれないハーブティーを口にする。

押し寄せる苦味で顔を背けた。

二人はそれを見て微笑む。

さながら親子のピクニックといった感じだ。

ま、単刀直入にいつてしまえば暇なのである。

そんな3人に一瞬影がかかる。

「ん？」

フォンは空を見た。

そこには青空が広がっている。

「・・・。」

そのまま一気にハーブティーを飲み干し、ティーカップをおいた。
それと同時に。

赤い巨大な龍が地響きをたてて3人の前に落ちてきた。

「GLAAAAAAAAA!!!!!!」

「きゃああ!!!!？」

リンネは悲鳴を上げて倒れこんだ。

この状況下でビビらない人間は普通いない。

「なるほどな・・・。」

フォンは立ち上がると剣を抜いた。

赤き守り手（後書き）

今回の話の補足をする。

ミアの作戦は一匹を起こして外の別働隊（？）の方へ誘導、残りの眠っている一匹を闇討ちで撃破！
でした。

龍は一回寝るとなかなか起きないそうです。

まあ石当てた程度で起きるならそれほど深い睡眠でもないような気が・・・＾＾；

決意

「GRYAAAAAAAAA!!!」

龍は咆哮してフォンと対峙する。

睨みつけるだけで生物など殺してしまえそうな黄金の瞳を、フォンはにらみつけた。

「それで？」

どうすればいい？軍師。」

「ちゃ、茶化さないで下さい!!」

チカラ押ししかないじゃないですか!!」

リンネはすでにパニック状態だ。

ま、こんな明らかに凶暴なドラゴンを目の前にして平然としてられるほうが異常だったりするわけだが・・・。

「GAOOOOOO!!」

レッドドラゴンは巨大で鋭利な爪を振りかざす。

「ちッ。」

フォンは飛び上がると、その爪が大地をえぐるより先に龍の腕を切りつけた。

しかし、剣は嫌な音をたて、振動が骨の髄にまで伝わる。

龍の腕は軽く火花が散っただけで、その赤い鱗には傷ひとつついていない。

そこへ、シーラの高速詠唱魔法が炸裂した。

放たれた雷は龍の鱗を焦がして、その巨体を後ずらせた。

「はああああ!!!」

龍の膝を足場にしてフォンが龍の顔面に向かって飛ぶ。

勢い良く動くフォンの身体に連動して剣が強力な一撃で振り落とされた。

「刃斬激!!!」

紫色の斬波が龍の額に傷をつけた。

灼熱の炎を思わせる赤い鱗の下は人と変わらない肌の色だった。

「G G A A A A ! ! !」

怒り狂ったレッドドラゴンのがむしゃらに吼えている・・・かのように見えた。

レッドドラゴンが咆哮したのと同時に地面からマグマの柱が聳え立った。

「きゃあああ!!」

リンネはその熱風に腰を落とす。

フォンは吹き飛ばされながらも体制を整え、地面に着地した。剣を縦に構えて視界の中で二つに分かれている龍を直視する。

龍は、翼を大きく広げ、無数のマグマの柱が聳え立つその中央で威嚇している。

普通の利巧な生物なら、その姿を見ただけで震え上がり逃げ出すだろう。

しかし、フォンはその龍に突っ込んだ。

何回も何回もその強固な鱗を切る。

斬られるたびに龍はポルテージを上げていく。

シーラも後ろから魔術支援をしてはいる、その一撃は確実に龍にダメージを与えている。

しかし、どうしても決定打にかけていた。

龍の血は不老不死の薬の材料だとされている。

本当にそんな効果があるかどうかは不明だが、その生き血に治癒の効果があることはわかる。

噴出すマグマの大地が徐々に熱を持ち始めてきている。

「あの下は・・・」

「そうか・・・」

リンネは無駄に熱せられた脳内を急激に冷やすかのように深呼吸した。

「フォンさん！龍の翼を集中攻撃してください!!」

「なに!？」

・・・わかった！」

龍の真正面に立っていたフォンは、その肩を踏み台にして後ろに回りこんだ。

「G A A A A A ! ! !」

レッドドラゴンの視線がフォンを追う。

「龍砲斬！！」

まっすぐに突き出された剣から突風が巻き起こり、突風は翼を斬りつけた。

無数の鱗がはじけとび、赤い血が吹き出る。

「龍火！連空砲！！！！」

連続して繰り出された奥義は、先ほどとは比べ物にならないパワーをほこる。

灰色の巨大な砲弾は、一直線に龍の翼の赤い鱗をえぐる。

「G Y A A A A A A ! ! ! ! !」

苦しそうに龍は吼えた。

その空気の振動にフォンの身体は耐え切れずに吹き飛ばされる。

フォンが地面に落ちるのと同時に、龍はその巨体を使って、フォンを亡き者にせんと飛び掛ろうとした。

龍が、飛び掛るために脚に力を籠めたその瞬間、リンネは叫んだ。

「シーラちゃん！あそこに火炎魔法！！」

同時に、一瞬とも変わらないシーラの高速魔法が燃え上がる。

燃え上がる炎の上級魔法レイジングストリームが龍の足元の地面を砕いた。

地面は吹き上がるマグマによって熱せられており、火炎魔法の助力を得て高温とし、大地は溶けるが如く崩壊した。

そして、その下に眠るマグマの地脈をあらわにした。

レッドドラゴンは落下していく巨体を支えきることなく、マグマの河の中に消えていく。

「G Y A A A A A A A A ! ! ! ! ! ! ! ! !」

断末魔と共に。

「うおおおおお！！！」

ウォンカはレッドドラゴンの横っ腹にハンマーをぶち込んだ。
白と赤の鱗がはじけ飛ぶ。

「GURAAAAA！！！」

レッドドラゴンは咆哮した。

それと同時にマグマの海が波立つ。

「ちょ！怒らせてるだけじゃん！！」

「うつせえ！！んな簡単に龍が倒せるんなら苦労しねーだろが！！」

「うお！ウォンカの兄貴！前々！！！」

「ぬおおおお！！！」

水平に振りかざされた爪の一撃を、ウォンカは根性で避けた。

ウルムの矢は歯が立たず、ミアの連続攻撃も無意味、実質ウォンカは一人で戦っていた。

「くそ！」

ウルムは龍の目に狙いをつける。

しかし、何度撃つても熱気のせいで気流が変わり、矢が思うところに飛ばない。

矢は、火口の方へと飛んでいった。

もう数十分もマグマの中の孤島で戦っているせいで、体力もほぼ限界だ。

「GAAAAA！！！」

レッドドラゴンは咆哮して飛び掛ってくるウォンカを吹き飛ばす。

「ちい！」

場所が悪すぎる。

空気は熱せられており、呼吸するだけで肺が焼けそうだ。

マグマの光は目さえ焼く。

ゴツゴツした溶岩の地面は悪く着地したら確実に足を挫くだろう。

それでも、跳ばなくてはこの巨大な龍にまともにダメージを与えることは不可能だ。

龍がすでに何度目か忘れたが、その鋭利な爪で地面をえぐる。

吹き飛ばされた石がウルムとミアを襲った。

「きゃあ!!」

「うわあ!!」

勢い良く跳んでくる石は身体に傷を作るのと同時に視界を塞ぐ。

跳んできた石にまぎれて龍が爪をたてた。

「!!!!!!!!!!」

ミアはその爪が自分に向かって飛んでくるその様子を見てしまった。身体が硬直し、もはや避けることはできない。

「きゃあああああ!!!!!!」

血浜きと共に、肉が引き裂かれる嫌な音を、ミアは聞いた。

その一撃は、華奢な体つきのミアの肉を、骨ごと斬って真っ二つにする。

どんなに修羅場を越えてきたにしろ、死の理からは逃れられない。

「つつ……ぐうつ……」

「あ……」

しかし、龍の爪はミアの目の前で止まっていた。

否、ウォンカによって止められていた。

確実に即死するような一撃を無理に止めたため、ウォンカの手は血であふれている。

「うおおらあああああ!!!!!!」

回転しながら爪を弾く。

「爆天衝!!」

そのまま爆発の如く放たれた衝撃波が爪を砕いた。

「GYAAAAA!!!!」

レッドドラゴンは爪から血を流しながらわめいた。

「くっ。」

ウォンカは追撃しようと踏み出した足を止め、膝をついた。

龍は再び止まる。が、それは時間稼ぎにしかすぎに。

「早く行って!!!」

ミアは元々小さいが、よけいに小さく見える片手剣を構えた。

「おい！」

ウォンカが叫んだが、ミアはそれを無視するかのように前へ出た。そして、少し振り返り、涙がこぼれそうな瞳で一言つぶやいた。

「ごめんね。」

ミアは前に向き直ると、レッドドラゴンをにらみつけた。

「はあああああ！！！！！！！！！！」

駆け出す視線の先で、レッドドラゴンが口に炎を含ませた。

最初にここに来たときは、2匹の龍を見て愕然としたが、1匹ならどうにかなると思った。

実際、
今まではどうにか耐えたのだ。

しかし、今回は違う。

ドラゴンなんかには勝てない。

それを実感した。

生まれ変わったら、ちゃんと覚えておこう。

そう、自分に言い聞かせて、繰り出される龍の炎に飛び込んだ。灼熱色に輝く炎はミアの身体の何倍もあった。

ミアが死を再び悟ったその瞬間、すぐ横を水流が駆け抜けた。

!!!

目の前で水と炎がぶつかり合い、相殺する。

水蒸気が呼吸と共に肺に流れ込み、むせる。

「ミアさん!!」

リンネが叫んでいた。

「GRAAAAAA!!!」

レッドドラゴンが霧の向こうで咆哮する。

目には、一本の矢が刺さっていた。

それは、さつきウルムが外し、火口へと飛んでいった矢だった。

レッドドラゴンは天を見上げながら苦しがつていた。

「閃光！徐甲墜刃！！」

フォンが火口から落下してくるのと同時に、光り輝く刀身を発生させる奥義で、龍を口から引き裂いた。

龍は、断末魔を上げることなく倒れこみ、マグマの津波を起こして消えていった。

「いいとこどりかよ。」

「安心しろ、俺ももう1匹の龍のいいところはリンネとシーラにもつていかれた。」

ウォンカとフォンが苦笑する。

「あああ！！！！！！」

ミアが叫ぶ声が、今は広く感じる洞窟内に響いた。

「お宝があ~~~~！！！！」

見れば、マグマを被った金銀財宝が、完全に融合していた。

「これじゃあ持ち運べないよあ~~~~。」

「あ、でもこの真珠のネックレスは無事みたいだぜ？」

ウルムが指差す場所に真珠のネックレスがあつた。

「本当！？」

期待を胸にミアがネックレスをとった。

しかし、真珠はボロボロと崩れた。

「あ。。。。。」

ミアは腰を落としてガツクリと肩も落とした。

「せつかく。。。苦労したのに。。。。」

「ええ〜つと。。。。」

リンネはどう励ましていいのかわからない様子だ。

ミアの後ろでオドオドしている。

「。。。ねえ、あの小屋に居たのって。。。間違いなくアンタた

「ちよね？」

「え？・・・ええ、そうですね。」

リンネは急に話しかけられて目を丸くしている。

「よし。決めた！！」

「アンタラに付いていく！」

「はああ！！？」

ウォンカは心の底から叫んだ。

「なんかさ、あんたらと居た方がお宝に出会えそうな感じがしてきた。」

「いやいやいや！！」

「よし！それっじゃあ帰ろうか！！」

ミアは塊と化した宝の山から下りてくる。

「・・・あんたにも借りかえさないといけないしね・・・。」

ウォンカの横を通るときに、ミアはそうささやいた。

決意（後書き）

久々の更新です。

ちよつと他の小説を読んで勉強したので今回は良い出来に仕上がったと思います。

具体的には「レンタルマ。カ」を参考にしました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3454d/>

フィールド・オブ・ジャスティス

2010年10月21日02時19分発行